華實年浪草

春之部

巻之一

783-1 ㊢済

俳諧資料カード

年代	天明三癸卯
編者(筆者)	三余斎
書名	華実年浪草
備考	春ー一 (1上)

(下垣内蔵)

俳諧三餘抄序

心不可不繫曲禮三子蓋
皆原于此君子無故琴
瑟不離身降此而往唄
竽皷瑟彈絃擊筑鬪犬

下垣内和人

走鶏六博蹋鞠何所不有唯至優游言詠置懐風月幽閑之趣何曾寘壊鶏君在

王府爵為朝散大夫不為非仕優而無他嗜好獨喜為譜語之國風之數爰者如詩之有伊風子歟其著是編博引旁捜無復所遺有助於斯技也

大矣因乞余題言余素
不習之焉雖贊一辭唯
言相識之久知其所以繫
心以為之序詩之善戲
謔兮不為虐
鵜君有焉
安永辛丑春三月
金峨井純卿撰

天明二年壬寅仲春

東江源鮮書

東江居士

華實年浪草三餘抄自序

夫雪月花ハ四季第一の景物として是乃

餘波なへてハ草木鳥獣ニ及ひ神祭佛事

公吏格式まてその類ひにいたるまて日ことに月に

かはる月にて四季にかゝるよしはなはた月花ならひとて

節物なと数に入れられて詩歌といひ連誹といふ

いつれのことはをとらへ種々別に撰ふ趣向良材あ

平也や中にも俳諧ハ和歌連哥の外にあらず
して志のふを其詞俗語俚話をもて骨とし風流
雅俗紙肉にして上ハ雲の上の人もしらかし
下ハ賤の伏屋の業をも寄し森羅萬象
みな趣向と取季句にも利楠ハなく鶯池に
すむ蛙といふも文字とし刷匙と尾の鷦鷯
酒樽に雑り瓢子にいたるまでいつれも俳諧に

なりける住句し詩ハ李白の思よりとゝてハ牡丹て
栗とし酒風雅枝をもる風流に挂乃理を好るよ
ある故に世の儿先賢雲節とぞする書簡
なかに過分の次緒をもって毎かまへ譲ることよ
省略いまゝ人のうきもの事なし予不敏なり
と云へと家其關之序をうけて亡然補ひ人とてかふ
るに久しく仕官のいとまな々折々の日の餘りに

考へ月乃綴りにおこしは年比綴りに記して一年
十二月までうち捨のうちに上下とわかちたるものわりたる
也これを十五巻俳諧三餘抄と名付く元より
綴るに便覧に残しおきて掛軸の義を撰出た
ましけり愚乃君子よりは根まくは誤りの誤り
又志る毎に深きを作りて所々の人々よりえて見るべきこと言
わりも唯帳中の記書乃類ひとしてむりなし

私塾は都遊をせず只謡せてわずかに得たる
不破の宮屋敷板庇を月影のもれ来て
まる深窓深きの人わかり一日書林何某
屋なる人来て其ころ戯に浅草上野乃余
遊び乃稲舟のいかにも此年に出でくて
京都にもいかゞ此書林に和漢の事實載
時の風俗を何事に俳諧乃料のかゞ人風情

抛ても志も人ありて志る事を紙魚をはらんやされハ
尋常の人のため又俳諧乃用ともなして記録を
華實年浪草と題して梓に縷ハめんとなん予
おもへらく周人ハ腐鼠と名つけて璞とし楚客ハ
山雞をあやまりて鳳凰となしけり皆識者の
そしりを免かれす今あらはす所も紀のわらひなる
書紙様ありて世に出せハいかんハ人のあさけりを

招くのことわりをしらさらんや辞すといへとも強て
是に依て需に應し今こゝに梓して後の人
その誤紙をわかちて其を補ひハおのつから紙
紀しなさん書意ならん

于時

天明元辛丑のとし臘月　油幕菴木雁子麁文題

手習草子序

おもふに能書の徳ハありや上古より
行事ハ梁下周家の筆書まて有色を
後年及ハ位を高ふ志して世乃ためとなれ
たりと来まて事まて筆数乃手跡一類あるに
ましとおもふすこしハ文句をそへ及ふ事
四時草木鳥獣乃品々世々の古き跡

選集季帳といふもの稽古の輩
手に行事るのみしるしとしへと毎
ものゝ志し小冊子にしてわづかなる
大全なるものを見んと欲す
竹乃園生の御宮仕しける朝散大夫
鶴川ぬし三餘齋文子官務の
いとま毎に筆を施しまとめて世を金馬門に

選集の志はやくよりす　滑稽を好
ひそかに撰みあつめて集あり且それの遊に
深き其の地に至り万葉の歳を種々の入
ましれ多き事ともを拾ひて言葉より
根葉に至るまで博く尚故に為学
あまねく書またより究極むべき
此度りて孫平吏功者く膝月のこと

俳諧の冊子全部十二巻を号て
年浪三餘抄と呼て予に其序を乞
兼て之を業とし久しく俳諧に序者ある
免と要すれして是を需るや蕉門の達
短才にして加る事綺粲の緒を解きと
拾綿繍草綴を織条の母織るに
志あれと此時より一義顔に拙を
忘れたる字を採て筆を空中に書て秋の
燈下對す

空摩居士
蓼太

蓼太二

年浪草三餘抄回向文 〔印〕

謹而この書に記し奉る所の神社佛閣乃
諸神諸仏に謹而して[illegible]識今此書冊を
著[illegible]童子の戯を指爪甲に[illegible]
もて佛像を画[illegible]の工に乃[illegible]狂言綺
語乃[illegible]罪障と[illegible]
[illegible]凡此書に[illegible]春秋[illegible]

阿まり寒暑をもいとはず寝食を忘れて作く
尭し自己書写造畫紙をもつて加持祈祷し
清らかなる紙をもつてもらひなくしよくせし
天明元年跛鼈のことく書つゞけたるの
微功をかさね今茲に全部十九巻編中の佛神に
信ある人々御ともに称へまつる漸々積功徳乃文
此のうへ次々哀愍納受しまします天下泰平國土

安穏先考先妣をはじめ法界の貴賤霊等 并此
書たつ物乃草木鳥獣虫魚乃ぬくもりに
至るまで悉皆成佛うたがひなし一章半句譬喩の
師友一葉すゝ張閲見の諸氏諸彌陀満の加護を
かうむりたまふと志るべし粗言軟語みな第一
義にかへし治生産業實相と違背せざるの
金言にも叶ひ給ふかの白舎人が相そ給ふを

ころし讃佛乘の縁なりし古の高僧乃得句先
献佛とて乃まへる意織あつめてその家利敬白
干時
天明元辛丑臘月　三餘齋麁文謹書

華實年浪草三餘抄巻之一上目録
○春　太皞　句芒　蒼天　東君　青陽　韶光　正月
陸月　一丁　○王春月　太簇　二丁　○立春　雨水　孟春
陬月　夏正　太郎月　初空月　霞初月　初春月　早緑月
年端月　三丁　○暮新月　元日　元朝　三朝　元三　三始
三元　履端　四方拝　星佛　四丁　○歯固　餅鏡　五丁
○供御藥　藥子　屠蘇　白散　度嶂散　六丁　○椒柏
酒　椒酒　椒觴　朝賀　朝拜　參賀　參瑞　小朝拜
七丁　○元日節會　諸司奏　七曜御暦　氷様　國栖奏

國栖笛 腹赤奏 八丁○院拜禮 祇園削掛 十一丁○
歳徳神 恵方棚 毘沙門功徳経 若夷 夷廻 大
黒舞 十二丁○春駒 鳥追 十三丁○傀儡師 猿曳
門神棚 門松 立松 飾松 飾竹 十四丁○飾縄
飾藁 注連飾 十五丁○飾炭 飾海老 橙 掛鯛
十六丁○若餅 雑煮祝 くんと祝 十八丁○いもれかゝミ
結昆布 大根 田牛蒡 田豆 大箸 蓬莱飾 喰積
十九丁○穂俵 榧 あのもれ 搗栗 串柿 柚 柑
二十丁○柑子 橘 楪 歯朶 穂長 裏白 廿一丁○昆
布 鯊煎 熨斗 野老 梅干 廿二丁○俵子
田作 小殿原 押鮎 海鼠 螺 肴 数子 廿三丁
○鯊煎賣 年男 庭竈 福藁 鋪福藁 廿四丁
○福沸 福鍋 毬打 ぶりく 廿五丁○羽子板 胡
鬼板 なわつく 廿六丁○破魔弓 破魔矢 年玉
廿七丁○宝引 福引 弓始 廿八丁○馬乗初 蔵開
廿九丁○湯殿始 飛馬始 着衣始 三十丁○船乗初
舟玉祭 三十一丁○幸木 幸籠 藁盒子 三物連歌
同誹諧 裏白連歌 同俳諧 三十二丁○御慶 去年

今年 君ヵ春 千代春 ゆるとし 新年 新玉年
若きま よひのま 初雞 三十三丁○ 初夢 初暦
暦開 三十四丁○ 試筆 試毫 吉書 書初 彈初
三十五丁○ 吹初 三十六丁○ 舞初 松囃 謡初 三十
七丁○ 初商 初賣 買初 店卸 帳閉 帳書 三十八
丁○ 歳旦開 節振舞 朝節 夕節 節小袖 松ノ内
注連内 春かゞ 三十九丁○ 初芝居 千寿万歳 萬歳 四
十丁○ 御降 寢積 寐擧 水祝 四十一丁○ 懸想文賣
桃符 桃板 桃梗 仙木 神荼 欝壘 畫雞 帖戸 二

葺索 如願 餕灰飛ス 春盤 生菜 四十二丁○ 採燕
戴春燕 初子日 子日遊 小松引 子日松 初子のあふ
の玉箒 四十三丁○ 初寅 四十四丁○ 畚卸 初卯 卯杖
四十五丁○ 二宮大饗 朝覲行幸 四十六丁○ 臨時客 あゆう
あく 四十七丁○ 履新之慶 叙位 天狗寡 四十八丁○ 人日
霊辰 七日正月 人ヲ帳ニ貼ス 初若菜 若菜 七種 薺
四十九丁○ 蒬菜摘 薺蒿摘 磯菜摘 五十二丁○ 白
馬節会 五十三丁○ 菜摘川神事 箕面富 五十四丁
○御齋会 五十五丁○ 真言院御修法 宿直人

大元師法　五十六丁

巻之一上目録終

華實年浪草三餘抄巻之一上　　三餘齋康文著

春

尚書曰物之動何以謂之春ーハ出也ーー物出也○漢書律暦志曰少陽者東方東動也陽氣動物於時為春ーハ蠢也物蠢生迺動運曰行東陸謂之春○和訓義解云春ヲハルト訓スルハ晴ルヽト云義也冬ハ陰氣多ク春天ハ晴多シ○日本釈名云一説はるハわるゝ也はるハよろつかくれて在にあらはれて萬物發生して有となる又云張也草木めくみはる神代を思へしと云々

太皞　帝

○禮月令註太皞伏羲木徳之君句芒少皞氏之子曰重木官之臣聖神繼天立極生有功德於民故後王於春祀之四時之帝與神皆此義下放之漢書魏相曰東方之神太皞乘震執規司春

句芒　神

○月令

其帝太皥其神句芒云々高辛氏帝天下置五行之官木正曰句芒為木神也

蒼天 春為蒼天○釈名曰気始発色蒼々也

東君 郊祀志曰晋巫祠東君師古曰東君日神也

青陽 爾雅曰春為青陽○月令廣義曰天地盛徳在木一色青

韶光 漢書律暦志曰景曰媚景韶景云々韶光亦春景而猶謂春光韶美也春ノ景色ノウルハシキヲ云ナリ

正月 潜確類書鄭玄曰日月之行一歳十二会観斗所建命其四時孟春者日月会於娵訾而斗建寅之辰云々夏時寅ヲ以テ正月トス是ヲ為人正商時丑ヲ以テ正月トス是ヲ為地正周時子ヲ以テ正月トス是ヲ為天正夏商周三代ノ正月別ニナリ天ハ子ニ開ケ地ハ丑ニ闢ケ人ハ寅ニ生ス故ニ斗柄建此三辰之月皆可以為歳首今夏正ヲ用フルコトハ孔聖モ顔子ニ夏ノ時ヲ行ヘト論語ニノ玉ヘリ○論語大全陳氏曰不曰一月而曰正月取王者居正之義○字彙曰元大也又善之長也又首也始也人君立極改年不曰一年而曰元年毎歳首月不曰一月而曰正月一日曰元日蓋欲人君體元以居正也守一以止為正从一从兀為元兀高貌正字本音去声之盛切音政至秦始皇諱政改為平声諸成切音征後生至今沿之○五雑組曰以一月為正月自唐虞已然舜以正月受終於文祖云々正月ヲ陸月ト云フ○世諺問答曰正月をむ月と申すハ如何答人のたかひに行かよひてむつましくむつぶる義なれハ正月をむつひ月と名付それを略してむつきといふなり云々正五九月ヲ三長月ト云○九傳正

義曰正長也此年之長月故称正月云長ハ頭ノ意一年ノ頭月也○琅邪代醉編釈氏智度論云天帝釈以宝鏡照四大州毎月一移察人善悪此三月所謂正五九月照南瞻部州唐人以此不行死刑云本朝仁明天皇承和三年五月詔アリテ毎年三長月於東寺灌頂院三七ノ比丘ヲ撰ヒ法ヲ修シ國家ヲ鎮護ナサシメ玉フ

王春月

左傳曰春王正月周正月也○律暦志曰春王月毎月書王元之三統也三統合一元○董仲舒傳曰春秋謂春謂王

太簇

律○月令曰正月律中太簇高誘曰簇ハ聚也言陰衰陽發萬物簇地而生○蔡邕月令章句曰律者率也声之管也上古聖人本陰陽別風声審清濁而不可以文載口傳也于是始鑄作鐘以主十二月之鐘難分別乃截竹為管謂之律律ハ者清濁之率法也声之清濁以律長短為制已下准之○淮南子曰一律而生五音十二律而為六十音因而六之六六三十六故三百六十音以當一歳之日節

立春

○月令廣義周天玉衡六向曰大寒後十五日斗柄指艮為立春正月節立始建也春炁始至故為之立也○滑稽雜談云正月朔日ヨリ前ニ立春アルヲ年内立春又ハ除ヿ立春ナト云當年之立春去年アリテ来春ノ立春又正月ニアルノ時ハ中一年立春ナシ是ヲ俗ニ空穗年ト云或説一其年ノ矢ヲ中ニ貯ヲ故ニ萠年ト云説侍ル覚束ナシ猶識者ニヨリテ決スヘシ云ヽ

雨水

中○月令廣義曰立春後十五日斗指寅為雨水正月中雨水中気雪散為水也

孟春

元帝纂要曰正月為孟春○周書曰凡四時成歳者春夏秋冬各有孟仲季以名十二月也

陬月

暦確類書曰正月為陬寅

位之月故曰孟陬亦曰孟陽離騒摂提貞于孟陬注
太歳在寅曰摂提格正月為陬孟陬者孟春正月也

夏正　月令

廣義曰大禹以金徳王都安邑國號夏
仍有虞以建寅之月為歳首故謂夏正

鷺水云人の

太郎月　子乃先まけれ

ふるとしの次の年まで猶ゆきとこそいへ
たくへて一とせのかゝらぬにたちそめし名あり

初空月　蔵玉　雪のふるとしなかり
さえはさえても
初空の月　後鳥羽院

霞初月　蔵玉　けさもなを山風さむしふる年の
その名ころや霞そめ月○定家

初春月　蔵玉　霞の川初春月の朝日かけのとけき
色や空にたつ春なん　家隆

早緑月　秘蔵　躬恒撰

年端月　莫傳抄　梅もまださかぬ
まちわひて月よ明
あしたかくる小松引乃の　貫之
としも月なもあらたまる

春暮新月　莫傳抄　月の世をしらん初春の
すみわたる

元日　玉燭宝典曰正月一日為元日○書言故事曰正月朔日謂之元日○舜典曰正元日舜格于文祖○朱子曰元ハ大也始也乾元天徳之大始故萬物資乾以始而有気資坤以生而有形云々是等ノ説ヲ見ルニ唐虞ノ時既ニ元日ノ名アリ○事文類聚曰正月上日朔日也夏以平明為朔殷以雞鳴為朔周以夜半為朔

元朝三朝　尚書大傳曰正月一日為歳之朝月之朝日之朝故曰三朝

元三　師古漢書注曰元三亦三朝同義也云々又元三者三元之轉称也云々

三始　元日ハ歳之始月之始日之始故云三始ト　始猶朝出于鮑宣傳

三元　玉燭宝典曰元日ハ歳之元時之元

月之元也故曰

履端

左傳曰先王之正時也履端于始ニ擧正ヲ於中ニ帰餘ヲ於終ニ三元ト元ハ始也

四方拜

元日寅一刻壬上出御清涼殿東庭拜四方○公事根源曰属星を唱へ天地四方山陵を拜し給ひと年災殃も拂ひ宝祚をも祈りたまふと云々○江次第ニ日本紀ニ曰皇極天皇元年八月朔ニ天皇幸南渕河上ニ跪拜四方ヲ祈雨ヲ云々元旦四方拜事始テ見寛平二年御記ニ云々委ハ江次第ニ見エタリ

星佛

滑稽雑談ニ云當年星ノ九曜是ヲ歳初ニ祭ラン為ニ其星ノ形像ヲ彫テ禁裏院中ヘハ佛工所ヨリ調進シ是ヲ顯密ノ行者或ハ陰陽家ニ仰テ星供ヲ行ハセ玉フ民間モ亦星ヲ祭ル此九曜ノ次第羅土水金日火計月木ト一歳ヨリ九歳ニテ至リ十歳ヨリ十八歳ト幾度モ九年目くニクリ返テ當年星トナル也惣テ星宿ノ秘法ハ唐ノ開元中ニ一行阿闍梨天文宿曜ノ術ニ通シ九曜曼多羅ヲ感得シ玉フト云々凡ッ人ノ災難口舌アルハ羅計火ノ三ッノ悪星ヨリ起ル宜ク請僧如法供粮シテ祀リ陀羅尼ヲ唱フヘシ消除一切災難陀羅尼経ニ我有大吉祥真言名破宿曜若能受持志心憶念其災自滅変禍為福ト云々

歯固　餅鏡

江次第曰元日平旦天皇御東廂（清涼殿也）自御厨子所供御臺二本内膳自右青瑣門供御歯固具（下器）歯ハ人ノ年齢ヲ云也歯固者延年固齢之義也○礼記文王世子曰歯亦齢也（注曰齢字従歯ノ異名也或言年齢又言年歯其義一也）○大戴礼ニ曰男八月生歯八歳而齔歯是人寿之数也○世諺問答曰しうとやしてもちゐ鏡をむかふるはいかなる事ぞや　答　人は歯をもて命とするゆへ歯の字をよはひとよむ也歯固はよはひをかたむるとてもちゐは近江の火切のもちゐを用ゆへしと云々○

荊楚歳時記曰元日食膠牙餳取膠固之義餅餅鏡形又○張天
如對類大全曰餅字下細注曰麥米粉做成状如鏡入於爐内烘熟盖始于
戦國ニ云唐土ニ進膠牙餳ト云膠牙ハ膠字ニカハモ又カタムル
訓ス牙ハキバ也餳ハアメ也餳ヲ食シテ牙ヲ固ルノ意本朝歯固
相似タリ○本朝食鑑ニ云本邦自古以餅為神明之供而作大団
塊以擬鏡形故呼餅称鏡此擬ハ咫鏡乎正月朔日必以鏡餅供
于諸神ニ及ヒ一家長幼團欒同薦鏡餅以賀新歳凡用鏡餅祝賀儀
以二箇相重ネ一重此謂寄用偶者乎○栄花物語云うへにもこゝにも
もちゐかゞみをそへつゝせたるふタカツキ六なまヲシキヲスヱ一ツ臺ニモ千歳大根
橘ヲモルくしも江の大キリノ餅と用ひなや山菅の鏡とナガムルナリ
後拾遺たゞしのもとのちとせのかゞみにかゝりける
我やどの世をもちゐるのかゞみなりけりちよのかげをうつしてぞ見る

河海抄曰歯固ノ具ニ大根ヲ用ル事アリ其故ニヤ一名ヲカ
ガミ草ト云○岷江入楚ニ歯固具　一本　煮塩　鮎　押鮎火干
皆上ニ置鮎串尾　一本　鯉　鳥　鹿　猪　皆随盛物串尾置上侯
貫之　一本　瓜漬　茄漬　蕪　大根　一本　屠蘇　白散
窪杯　空盞　一本　酒盞　窪杯四口　一本　鏡　相具鮎
大根橘　歯固ハよはひをカタクスト也馬ヲ歯ヲ以テ齢ヲ知其理おなじもの也

供御薬　薬子　屠蘇　白散　度嶂散　江次第曰
弘仁年中始之　元日平旦天皇御東廂著御生気方御座　陪膳女房以下著座薬
子入自鬼間候尚薬南座采女二人御薬女官頭一人女官六人　候於右青
瑣門内御厨子所供御臺二本ヲ得選於鬼間御陳子付女蔵人女
蔵人執之来授陪膳内膳自右青瑣門供歯固具次供一献屠蘇散也

洗燧御酒 主殿寮設火炉 以御薬入於酒名之屠蘇盛別器宮内輔典薬頭
侍醫等三人一一進膝突掌之依位階皆用別杯次供御酒盃次
供御料酒此間内膳官人以大土杯三枚小土器三枚與薬女官
女官前分令掌薬子 本方自小児起 次盛御酒盃自御几帳綻付於薬頭薬
頭傳陪膳主上入自夜御殿面戸當塗篭東方戸立給陪膳女房
取御酒盃 入御酒 通自東廂御障子参御前供之次呂後取次女官
移入御酒盃餘分御銚子餘分等於大土器傳給於後取人飲畢
次供二献 神明白散也 次供銀匙居馬頭盤入神明白散於金銅小器居
中盤尚薬御薬入御酒盃次供御畢後女官以匙三度入白散於
大土器次飲分給後取次供三献 度嶂散 其儀與二献同云々 略記 ○公
事根源曰五十二代嵯峨天皇弘仁年中よりはじまる一人先これを
のめは一家病なし一家より先を飲ぬれは一里に病なしといふ…

…年の…ぬるなりや云々 ○紀事云古屠蘇之屠忌死尸之
尸加一点作戸是本朝之故實也薬子江次第奉仰之人求童女
未嫁之者屠蘇酒廣韻元日飲之可除瘟氣屠者屠絶鬼氣蘇者
蘇醒人魂俗説屠蘇草菴之名昔有人居草菴中毎歳除夜遺閭
里薬一剤令井中浸之至元日取水置於樽合家飲之不病瘟疫
孫思邈有屠蘇酒方蓋取菴名以名酒後人遂以屠蘇為酒名矣
○時鏡新書曰元日飲屠蘇酒先從小者起或有問董勛者答曰
俗以小者得歳故賀之 ○江次第曰御酒訓三寸者飲酒則邪氣
去皮膚三寸云々 ○釈名云酒
さくるゝ風寒の氣をさくるなり

椒柏酒 椒酒 椒觴

荊楚歳時記曰
元日進椒柏酒椒是玉衡星精也服之令人身輕能走柏是仙薬
○崔寔四民月令曰正月之旦潔祀祖禰進酒降神畢子孫各上

椒酒於家長ニ云々○風土記曰元日長幼悉正衣冠以次拜賀進椒酒飲桃湯及柏葉酒云々椒觴椒盃椒盤皆進椒飲酒之器也

朝賀 朝拜 叅賀 叅瑞 小朝拜

賀正之儀和漢共同○日本紀曰神武天皇辛酉年春正月庚辰朔即帝位於橿原宮是歳爲天皇始年云々此天皇東征シ玉ヒ天下平然後即位万世王道ノ基ヲ肇玉フヨリ賀正ノ儀起レリ○同紀廿五大化二年孝徳正月甲子朔賀正禮畢則宣改新之詔○舊事本紀七神武天皇本紀曰即位賀正建都践祚等事並發此時○杜氏通典曰漢高祖十月定秦遂為歳首七年長樂宮成制群臣朝賀儀武帝改用夏正建寅之朔云々神武元年周恵王十七年ニ當ル先漢四百六十年○大明一統賦曰正旦百官朝賀天下大小衙門拜闕民間

叅賀○公事根源曰拜賀とは元日辰の時天子大極殿にて行はせたまふ群臣皆礼服を着して御前位の儀式に同し 叅賀叅瑞とも云去年此日おり瑞ありしを乃奏し給ふよりやみぬれど今日叅賀するとぞ云々小朝拜江次第曰殿上王卿於射場殿邊着靴令頭藏人奏侯由次御装束垂母屋御簾撤晝御座敷二色綾毯代立殿上御倚子次宸儀出御次藏人帰出告御出由王卿経明儀仙華門列立庭中次拜舞次各退出云々○公事根源曰此事は只臣下の元日にわたくしの天子を拜し奉るゆへなりき公事にはあらずして朝庭の事をも行ふものは事侍るにも行れて是は私の礼なり君に私なしと云ふ事より不可有事とて六十代延喜の御宇に勅ありて延喜五年左大臣時平公に仰てとゞめさせ給ひしかり旅祝以て百官悉く集まるところへとも小朝拜は云

殿上えらし故ニ私あるに似たりとて留守せ給ひけるを摂政に臣下とも
元正の日君を拝しまゐらせ給ふ頃より中絶せりしが十九年に又元の如く
行はれ

元日節會 諸司奏 七曜御暦 氷様 國栖奏

國栖笛 腹赤奏

日本紀ニ曰持統天皇四年正月戊寅朔庚辰宴公卿内裏甲申宴公卿内裏仍テ賜衣裳ヲ○續日本紀ニ曰光仁天皇宝亀四年正月丁丑朔宴五位已上於内裏ニ賜被ヲ云〻○滑稽雑談ニ云此節会ハ天子紫宸殿ニ渡御ナリテ群臣百官ニ酒ヲ給テ宴会有儀也宴会ト書テトヨノアカリトヨメリ（仁徳天皇紀ニ宴会 止与乃阿加利）大カタノ節会ノ名ニテ侍ルニヤ豊明節会（十一月中辰日）ニハ限ヘカラス神武天皇ノ御宇ニモ群臣ヲツトヘテ酒ヲ給シ事日本紀ニ見エタリ是ナトヲモ元ノ紀

トハ申ヘキ歟云〻其式江次第ニ詳ナリ元日宴ト云題ニテトヨノアカリト讀ノル○むつきたつけふのまとゐや何ならんとよのあかりのはしめなるらん　顕昭　此人ハ顕輔卿ノ猶子其頃ノ才者博覧也

宴会ヲ豊ノ明トヨメル證哥ナルヘシ豊ノ明ト云詞五節ニ限ルマシキ由雑談抄ニイヘリ○諸司奏者○江次第ニ曰可付内侍所ニ由件ノ外任奏次ニ被付人蔵奏中務省御暦奏宮内省氷様奏腹赤奏（若遣期不参七日奏之）若當卯日卯杖奏等也奉御ヲ御外記往年王卿就外弁後被御下者外記傳御外弁外記申外弁上卿ニ（中古以来無此儀）○七曜御暦者○日本紀ニ曰推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用暦ヲ云〻去戊年之百済勧操用暦等書来○延喜式中務省式曰其後官人率陰陽寮入自建春門進七曜御暦ヲ云〻○公事根源曰七曜の御暦と申は日月火水木金土の七曜をしるせるよしの暦なり云〻○氷様者○

日本紀曰仁徳天皇六十二年是歳額田大中彦皇子獵于鬪雞野時皇子自山上瞻野中有物其形如廬乃遣使者令視還来之曰窟也因喚鬪雞稲置大山主問之曰有其野中者何窟矣啓之曰氷室也皇子曰其藏如何亦奚用焉曰堀土丈餘以草蓋其上敦敷茅荻取氷以置其上既経夏月而不泮其用之當熱月漬氷酒以用也皇子則将来其氷献于御門仁徳天皇歓之自是以後毎當季冬必藏氷至春分始散氷也云〻○延喜式宮内省式曰凡藏氷之處投氷多少及氷厚薄毎處具録元日群臣未喚之前省輔已上将本司入奏并進氷様○同主水司式曰氷池風神九所○同抄云宮内省氷様奏主水司奏之此司属宮内省氷様者氷室厚薄寸法以瓦石為其様奏之○公事根源曰氷の多くいふハ秘の諺し氷乃いめを凶年そゆとハ氷の沙汰よて大法秘法を行れしとぞ○

國栖ノ奏者○日本紀曰應神天皇十九年冬十月朔幸吉野宮時國樔人来朝之因以醴酒献天皇而歌之曰云〻歌之既訖則撃口以仰咲今國樔献土毛之日歌訖即撃口仰咲者蓋上古之遺則也○延喜式寓曰凡諸節会吉野國栖献御贄奏歌曲毎節以十七人為定（国栖十二人笛工五人但笛工二人在山城国綴喜郡）夫國栖者其為人甚淳朴也毎取山果食亦煮蝦蟆為上味曰名毛瀰其土自京東南之隔山而居于吉野川上峯嶮谷深道路狹巘故雖不遠於京本希朝来然自此之後屡参赴以献土毛其土毛者栗菌年魚之類焉云〻近世吉野ヨリ参ル事絶タリ○公事根源曰今の国栖乃奏とて秋とらひ笛を吹なりすハ右昔より来れ始よりまろうるふんかつ云〻○國栖笛者○江次第曰國栖歌笛於美明門外奏之云〻○雜談抄云國栖ノ歌笛ハ諸書ヲ考ルニ元日ニ不限七日ノ節会又踏歌節会五節

ナシトニモ見エタリ作者心得ヘシ但始ヲモテ正トスレハ早春ニ許用セリ云〻○腹赤者○肥後國風土記云玉名郡長渚濱在郡西昔者大足彦天皇誅球磨噌唹還駕之時泊御船於濱云〻又御船左右游魚多之棹人吉備国朝勝見鈎之多有所獲即献天皇勅曰所献之魚此為何魚朝勝見奏申未解其名正似鱒魚耳歷御覧曰俗見多物即云尓陪佐尓今所献魚甚此多有可謂尓陪魚其縁也云〻萬信云鱒又倭名腹赤○聖武ノ御時大宰府ヨリ是ヲ奉ル今モ筑州千年川ニ鱒多シ千年川太宰府近云〻○公事根源曰腹赤の贄とて奏を筑紫よりたてまつる事ハ穂て節会なとに供りけるや腹赤ハ食物として喰さしゝ此魚を名付して喰より十二代景行天皇筑紫の古ミて御人を給ふてある其後四十五代聖武天皇の御時天平十五年正月十四日太宰府よりたてまつりしてより毎の節会には供まいらせきりしと定められしなり腹赤よい鰐の魚乃るまなり

年中行事歌合 初春の年の世の例乃大宰府よりたてまつる腹赤も我君の為 四辻二位中将

院拜禮

大府記曰延久五年正月一日辛巳院拜礼午剋諸卿以下参集次垂晝御座庇御簾五位蔵人同次御出直衣御装束也次関白前太政大臣右大臣并大納言中納言参議以上一列庭中次殿上四位以下別當判官代等一列拜舞了之後従上臈次第退譯記○中右記曰院拜礼可候否事之條年首拜礼者臣拜君也非公儀不可謙御被申可候之由○是院拜礼朝拜等凡下之年礼之意也云〻○古今著聞集云仁平元年正月一日八条太政大臣七十二ニテ立給ケリ一度拜シテ二度拜シ給ケリ此事礼記ニ見エタリトカヤ○雜談抄云礼王制篇曰八十拜君命一坐再至ト云義ニヤトイヘリ

祇園削掛

元朝寅尅 紀事云晦日子刻祇園社神前灯燭之外悉滅火暗中参詣人恣口而斥言他人瑕疵假令雖聞其声知其人不争之不恨之是懺悔伐而勧善懲悪之微意乎房州千葉笑亦此類也巳刻許執行棄腰輿社司前駆而執行登拝殿向神前而黙坐少焉誦経咒東西楠内預建削掛木左右各六也是表十二月之数是称卯杖而同時燎之傳言其焔向西則丹波国来年五穀不熟向東則近江国又然也依此占両国之豊凶故居西方人高声呼近江近江東方人謂丹波丹波欲避其焔気也其后社司新汲井水以削掛火調元朝之供物是新年改水火之義也参詣諸人亦携其火而歸家煮元日之羹云々

○神社啓蒙曰祇園社在山城国愛宕郡八坂郷所祭神三座午頭天皇 神代巻素盞烏尊 簠簋内傳云商貴神 八王子東 神代巻五男三女神 内傳暦中八将神 少将井西 神代巻奇稲田姫 内傳南海頗梨女

○根元抄云昔常住寺十禅師円如大法師依神託貞観十八年奉移山城国愛宕郡八坂郷樹下其後昭宣公感威験壊運臺宇建立精舎云々

歳徳神 元方棚

紀事云陰陽家因来年之支干而四方間考吉兆之方是称得方俗間毎家向其方高張棚飾葦索建松竹献供物并燈火而祭之是謂年徳棚凡新年出納物飲食類必先献之神仏参詣万事経営始自此方云々簠簋内傳云年徳神者頗梨女所謂八将神母也北天竺吉祥天王舎城王号商貴帝遊戯三界探題諸星名天刑星降娑婆界改号午頭天王毘盧遮那化身頭戴犢肉猶如夜叉形類人間雖求后妃而未得時有青鳥自空飛来似鳩呼曰我是天帝使者與天王本同仕帝釈我名曰毘首陀羅天王今欲得后妃故天帝令我教告南海有沙渇羅龍宮是有三女第一金毘羅女

第二帰命女嫁北海龍宮ニ雉陀拔雉陀哦第三頗梨女貞甚美麗為君可
宜之天王大ニ歓乃赴南海其道遠八万里程也凌南海到龍宮此道
間有巨旦蕪民之事龍王出迎天皇遂娶頗梨女既而経年誕八王子是則八
将神大歳神大将神大陰神歳別神歳破神歳殺神黄幡神豹尾神也此歳徳神甲巳歳寅卯間丙戊
辛癸年巳午間庚乙歳申酉間壬丁年亥子間鎮座也云々世俗此
方ニ向テ其年ノ有徳ヲ祈ルモノナラシ

毘沙門功徳経　若夷　夷廻　大黒舞

紀事云京師街
頭賣鞍馬毘沙門天紙符并弱恵美須等福神之簡四民買之貼
門戸或供歳徳棚元日拜之祈福索作南都市中毎年自吉野来
賣守福神之札元日曉巡市中高声謂須迎辯才天若有求之人
則賣弁才天之札二日曉又謂須迎毘沙門天則賣毘沙门天之

札元日曉又謂須迎恵美須猶京師元日曉天賣弱恵美須一
云々○雑談抄ニ云古老傳ヘ云往昔ハ元朝寅ノ時ニ犬神人禁裏日并
門ノ外ニ参テ毘沙門経ノ文句ヲ訓讀ニ唱テ祝ノ儀ヲナセ
リ故ニ此者ノ黨類ヲ呼テ唱門師ト称ス又元日毎ニ夙ニ候
スル故夙ノ者ト号ス夙ノ字音志久世誤テ志由久ト云夙ト
宿ト音近キ故カ民家ヘモ元朝未明門ヘ来リテ毘沙門経ヲ
訓讀ヒシ事中古迄侍シ也當世絶テ沙汰ナシト云々毘沙門天
功徳経ニ曰歎奉仕毗沙門者毎月元三日ニ清身著新衣向東北方
称念毘沙門名号者得大福徳決定無疑云々○夷廻者是即傀儡
師ニテ云津國西宮ニ跡ヲ垂玉フ夷三郎殿歳ノ始ニ衆生ニ笑
ヒヲシ。イサヽセテ冨貴ヲ守ラントノ託宣ニテ昔ヨリ西宮
ヨリ春ノ始ニハ都ヲ始方々傀儡ヽハシテ動ムル也此傀儡

子ヲ夷カキ氏云鷺水七夷廻トイヘリ又京大坂ニテ大黒舞ノ類ニテ夷三郎殿ノ姿ヲマ子ビ鯛ヲ釣タミサイナト囃モアレト是ハ悲田寺或ハ四ケ所ノ垣外ノ賤キモノヽ業ナリ○大黒舞者是モ亦悲田寺垣外ノ類大黒天ノ姿ヲ摸シ面ヲカブリ頭巾ヲ着テ民間ノ門々ヲ歌ヒ舞フ年々嘉祝ノ詞ヲ以テ新作シテ唄フ故ニ此唱歌ヲモ大黒舞トエフナリ夷大黒ノ事正月十日霜月甲子祭ノ下ニ記ス

春駒

故事要言ニ云年ノ始ニ馬ヲ作リテ頭ニ戴キ歌ヒ舞モノ是ヲ春駒ト名ケテ都鄙トモニアリ是ハ禁中ニテ正月七日白馬ヲ御覧ノ事アリ是ヲ下ニウチテ侍ニヤ

鳥追

雍州府志ニ云乞丐人自元日至十五日者菅笠以白巾覆面而敲手唱祝語倚門戸ニ請米銭是号敲与次郎又称鳥追元民間出自追

拂田囀鳥之辞者也ト云

傀儡師

事物紀原ニ曰傀儡ハ漢高祖平城ニ圍マレシ時陣平カ計ヲ以テ木ヲ以テ美人ヲ為テ城上ニ立冒頓閼氏ヲ詐リ後人此ニ因テ傀儡ヲ為トエフ○列子ニハ周ノ穆王ノ時偃師トイヘル巧人アリ木偶人ヲ為テ舞シム盛姫共ニ観玉フニ舞終テ木偶人瞬目シテ手ヲ以テ王ノ左右ヲ招ク王疑怒テ偃師ヲ殺サントスヨツテ木偶人ヲ壊テ漆膠ヲ以テカラクリタルヲ見セ其疑ヲトクトイヘリ傀儡ハ夷廻ナリ其名異ナル故再出スニヤ○捨芥抄ニ云大井川霊所七瀬ノ下ニ傀儡居住上一町許仁治ニ四以在成誤注付之云々嘉録四年百首寄傀儡戀

大ゐ川岸のとまやの竹柱うきふしやかさねかゝらん　為家

烏丸資慶卿記玉フハ傀儡ハ淀江口その遊流も是ハよくつるれとも

一来つかうれかなかと怪あくよゝミ
まるこの立てし但ゑてん得るや

猿曳

紀事ニ云乞京師舞猿者有六人倭俗祖公謂猿麻汲志又云猿牽献赤縄於高貴家或舞猿作厩禱ニ云是馬櫪神トニ云厩ノ神ヲ祭ル禱ナリ正五九月祭祀ス○本草綱目時珍曰繋獼猴於厩辟馬病擾之乎

門神棚

未詳其義按月令廣義曰除夜祭門神注道家謂門神左曰門丞右為戸尉蓋司門之神其義本自桃符以神荼鬱塁辟邪故樹之千門云云本朝亦擬此意乎

門松　立松　飾松

飾竹

世諺問答曰門の松立る事ハむかしよりある事なるべし
松をたてゝ世に、ときはなり竹をそへて世を賀る物なれハ年ゝ始に祝ひけり
用ゆるなりし一条禅閤乃御説作きゆるへきこと○篋簏ノ説又其所以アルベシ一書ニ云歳始毎家食煮餅也門ニ樹松竹也飾藁縄亦皆哉

神国之遺風焉相傳　垂仁天皇時大巳貴尊諭大田田根子命曰元月元日以赤白餅祭吾荒魂天刑大神国中無災而来福續凡節辰祭皆始大田田根子命此命常見神如談人故利世祭礼習傳而見行云云○紀事ニ云凡新年之賀儀各有方土之異有一家之例其式様不一惟家内之華索并門前之松竹者夏夷共同之倭俗正月門前左右各建松竹一竿上横竹両竿其外面掛昆布果實等物名称門松或立松蓋孟春之月祝戸義乎云云○禮月令集説曰戸者人所出入司之有神此神是陽気在戸之内春陽気出故祭之○錦繡萬花谷董一勅答問曰歳首祝析松枝男七女二以為藥飲云云○史記亀策傳曰松栢為百木之長而守門閭○徴祥記曰王者徳至於天和気感而甘露降尊賢容衆不失細微則竹葦受之○蕭穎子竹篇曰君子秉心惟其正直云云松竹ノ目

出處例ハ和歌ニ

古今 ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

後拾遺賀 春日山岩ねの松は君がため千とせのみかは万代ぞへん　能因法師

續千載賀 たちかへりくははる万代とゆふつるかけ九重乃庭のしめ竹　後三條院

飾縄 飾藁 注連飾

神代巻ニ曰時ニ手力雄神則奉承天照太神之手而引而奉出於是中臣神忌部神則界以端出之縄乃請曰勿復還幸云云○土佐日記ニこへのしりくめなよしといへるも注連なり○世諺問答曰しめ縄といふものはもろもろの縄なりて縄乃すゑを結へぬものにて清浄なるいはれにてしめくくるへぬをすなはちなるゆへり浄不浄をわかつ由へ神るの時をかみよ次に正月の神を祝ふる祝也○釈名云注連ハ神のしめくくる也あらたまる年をいはふなり縄ハかならず紀なり縄ハ左へよるなり○荊楚歳時記曰正月朔日帖畫雞戸上懸葦索於其上挿符於旁百鬼畏之云云葦稿同○說文曰稈禾莖也即稭之和皮者也祭天以為席云云凡米穀繁生命至寳無衆草加之者神明賞美之洗米散米新薦注連等最所重也云云和漢用葦索之意可知也○後成恩寺殿墓疏曰尤縄端出此釋其義又解其訓縄者直之儀神道以直為本尤者陽徳取清明之儀端出者綯索而不整雪其殘餘之芒端也是質朴而不飾之意故以直清質為神明之徳一條之縄而具此三徳即注連也云云

飾炭

簠簋内傳曰午頭天王率后妃八王子及諸眷屬到廣遠国滅巨旦旋其斷巨旦屍配五節供行調伏威儀所謂肇年門松巨旦墓驗木而上結炭華送火炉也云云○本草綱目曰白炭除夜立之戸内亦辟邪惡云云可據辟邪惡之義簠簋之説如何

飾海老

紅鰕

借謂之伊勢海老或称鎌倉海老以為賀祝之者因借春盤用之
○時珍本草曰鰕音霞俗作蝦入湯則紅色如霞云々○和漢三才図
会云勢州相州多有之形状詳見于此書

橙

格物論云橙橘属樹高枝葉不類於橘亦有刺云々順和名曰橙似柚而小者也
和名安倍太知波奈○和漢三才図会云橙樹高丈許周過於尺
其葉扁大似乳柑而短背色淡五月開小白花凡歴八年者結実
也形円其気苦臭霜後黄熟其瓣苦微酸不堪食至春色濃耐久
夏後変色青新旧不可辨故俗呼名代々雖不啖而以為嘉祝果
也

懸鯛

本朝食鑑云本朝毎歳始千門萬戸令雙青松雙青
竹相対而立向上横引于注連縄而中間懸干鯛
雙尾海老煮紅一箇及橙橘白柹昆布海藻裹白譲葉等数品官
家用大干鯛其餘中小任意用之号曰懸鯛是祝寿辟邪未知
何然但我邦之旧流例也○紀事云元日小鯛魚一雙以藁索
両喉挿歯朶并由都里葉懸竃上是称掛鯛至六月朔日和羹而
食之云々如此則辟温
疫痢病諸邪気也

若水　包井　井華水　若水桶

江次第曰供立春水事旧年封御生気方人家井一用之後廃而
不用之自御厨子所付臺盤所女房供之於朝餉土高坏上置折
敷面押紙大土器盛立春水居折敷供之陪膳居之於高坏上一度御
飲畢徹之○世諺問答曰とこしへも此日ハ井花水とてわかくなる
ゆゑを候すやらん○公事根源曰荒玉の年の川日の光をまちて
水を汲ことハ年中の邪気を除くといふ此文ある歟と云
流云事も○御傘云若水は立春なり元日わかく成と云事言し今華
も用ひて見えたり○本朝食鑑云今有称堀井者能察地中水脉之

好處鑿之成井其浅深據水脉也不時初汲曰新汲水若人既汲
之後汲之者非新汲水平旦第一汲曰井華水○紀事云元日朝
諸家新汲井水是称若水倭俗汲若字代老弱之弱而用之云是
汲元朝為若水也○嘉祐本草曰新汲水却邪調中下熱氣宜飲
之○世本曰伯益作井黄帝始穿井井者穿地為井汲瓶汲水謂
之井○釈名曰井清也泉之清潔者也○釈名云井はいづるしゐ乃
おのづから下を潤せり一説みなくしわつまる言者ハ後代のやく家々に井なくして
一和よわつまり汲しける○桶ハ穠勦曰汲水器也○釈名云おけハうけ
なり井かうくし○包井ハ御生気ノ方ノ井ニ
蓋ヲシテ立春ニ開ヲ包井開ト云ナリ

大服

大服者点茶之名也○紀事云
其式点茶或漬塩梅椒於茗碗之内而合家飲之又献賀客是謂
大服用梅高年後面皮生皺而欲倣塩梅之皺面也椒服之令人
身軽能走ト云○淡海志云正月詞ニ祝テ勢田ニハ大服茶ヲ点
テ吹タリ廻タリト云テ呑矢橋ニハ是ニ異ナリ早ニ粥ヲ食
テ今日ハ能カイ日和ナリト云ト云是互ニ旅人ノ多ヲ悦ブ
也○今式云大服といふ事古格わりといへども服といふ文
字なれバ服よかつてよろしくと源道く松濤蘭如といふ俳人大ぶくと
他からも何ぞ禍福其綱よろんやとて○大服や二口よもるし壽福録
とせしにそれ年頭縁の慈わりて服と定めけるとぞ○雑談抄ニ云
六十二代村上帝六波羅密寺ノ観音ヲ信敬シ玉フ或時御悩
ノ事アリ醫藥験ヲ失フ當寺ノ本尊霊夢ノ告アリテ供スル
所ノ奠茶ヲ服シ玉ヒテ御悩平愈シ玉ヘリ然レハ主上ノ服
御スルヲ以テ王服ト称シ毎歳元旦ニ當寺ノ供茶ヲ召テ服
シ玉フ由縁起ニ出ヅト云又足利家ノ時茶道盛ンノ故ニ始ト云

若餅

三日ノ間ニ搗ヲ若餅ト云由古老イヘリ○雑談抄ニ一説ニ云三ヶ日ニ餅搗事有ヘカラス俗ニ餅ノ大小ヲ云時少キヲ若キト云是小ノ詞ヲ忌テ云是賀客ニ饗食スルニ便リ有ユヘニ小キヲ賄フル故トニ云ヽ唯可為祝詞而已○庖厨本草ニ云倭名抄釈名ニ餅ハ合糯麪合并也胡餅ハ著麻者細注俗ニ云餅粉阿連是也元昇曰此説ヲミヽレハ今俗ニ用ル餅也云ヽ

雑煮祝　かんと祝

紀事ニ云元日朝良賤食雑煮ヲ又盛雑煮并飯汁於小土器而供神仏ニ又祭竈并井ヲ凡今日良賤調味多用鰤魚鯨魚鰯魚数子熬海鼠串石決明并牛蒡大根等ヲ云ヽ○雑談抄云雑煮ハ餅ニ大根芋蹲鴟昆布串アハビイリコ海鼠等ヲ加ヘテ羹トシ喰フ多種ヲ交ヘ煮ル故ニ雑煮ト称スル歟是ヲ略シテ羹ヲ祝フト云○事文類聚曰唐立春日春餅生菜ヲ踈春盤ト齊人月令ニ曰食生菜ヲ取迎新之意○年齊拾唾ニ曰元朝餉餅事汀州嘉靖丁亥志ニ曰汀国人ハ餅ヲ舂テ賓客ヲ餐ス貧キ人ハ市ニ買求テ節会ニナストニ云ヽ

いもかしらみ

芋頭ヲ云頭ヲ頭ト云フ所謂祝語ナリ芸番頭木工頭ノカミヲカリテ云芋魁正月祭及嘉祝ニ必ス用之者取多子之義也 蹲鴟出于華陽国志 踆鴟出于漢貨殖傳

結昆布

雑煮ニ寃テ結昆布ヲ加フルハ正月ヲ陸月トモ云ストツト相通ス昆布ハ倭俗悦ブト云義ヲ含ムムツヒヨロコブ意ニヤ

大根

歯固ノ具并雑煮ニ用フヨツテ鏡草ト云由岷江入楚ニモ見ユ○韓保昇蜀本草ニ云莱服俗名ニ羅匐按ニ尓雅ニ云突蘆萉孫炎注ニ曰紫花菘也俗呼温菘ト似蕪菁大根俗名雹突猶見冬之部ニ春季ハ鏡艸ト云ヘシ

開午蒡

開豆（ヒラキマメ） 紀事ニ云 開豆ハ水煮ノ大豆是ヲ謂フ 開豆開午蒡ハ不煮而生ノ午蒡也 如ク茅木ニ盛之ヲ 仍テ謂之茅木午蒡ト 又曰 開午蒡 両種共ニ土器ニ盛之 而敷於歯朶楪ニ云

大箸（フトバシ） 又謂之羹箸ト 説文ニ曰 箸ハ飯敧也 从竹者声 今俗作筋 或作櫡 ○韓子ニ曰 商紂始テ以テ象ヲ為ス之ヲ ○順和名 唐韻ニ云 筋 和名波之 匙也 字亦作ル箸ニ 倭俗用歳始ニ 箸尤太キ故ニ是ヲ謂フ太箸ト ○雑談抄ニ云 箸ノ折ルハ落馬ノ相ト云 将軍義勝幼少ニテ治世ノ時 元朝ノ視式ノ箸折タリ 其年ノ秋落馬ニテ失玉フ 御舎弟義政續テ治世ノ時 箸ノ不ル折様ニ家臣ノ取計ニテ 本ト古實ニ非ス 民間ノ用ニテ 元朝羹ニ用ル為ナリト云

蓬莱飾（ホウライカザリ） 食積（クヒツミ） 紀事ニ云 倭俗新年ニ三方臺ニ置 海老 熨斗 昆布 榧 橙 穂俵等 先供 賀客ニ 祝フ新年ヲ 是ヲ謂フ蓬莱臺ト云 是唐ノ立春ノ日 春餅生菜ヲ 號メ春盤ト 而以テ嘗之ヲ ○史記本記

曰 海中ニ有リ三神山 曰フ蓬莱方丈瀛州 僊人居之 ○列子ニ曰 渤海ノ東ニ有リ山 一ニ曰岱輿ト 二ニ曰員嶠ト 三ニ曰方壺 四ニ曰瀛州 五ニ曰蓬莱ト 華實皆有リ滋味 食之ヲ不老不死 所ノ居ル人皆仙聖之種ト云 蓬莱盤擬之乎

穂俵（ホンダハラ） 莫鳴菜（ホンダハラ） 本朝式ニ曰 奈々曰奈乃里曽 ○倭名抄ニ曰 本文未タ詳 神馬莫騎之義也 ○和漢三才圖会ニ曰 此藻 莖細扁 長三四尺 最長者丈許 而有節 小椏上ニ有リ細尖葉 ノ間ニ結フ小田子ヲ 中空ニテ撚潰之ヲ 有リ音出ス 水ヨリ初正青 乾ハ則黒色 西南海ニ多ク有之 冬取乾之ヲ 以テ葉稈ヲ一握許リ折 巻束之ヲ 様作ル米俵ノ形ニ 名ク穂俵ト 為ス正月蓬莱盤ノ飾ト

榧（カヤ） 本草綱目ニ曰 栢ニ 釈名 榧子 側栢 藕 頌曰 三月開花ヲ 九月結子ヲ 其實成ル梂 状如小鈴 ○史記ニ曰 松柏ハ為ス百木ノ長ト ○漢武内傳曰 薬ニ有リ松栢之青 服之ヲ可以テ延年ヲ云 仍テ為ス嘉祝之物者カ乎

[illegible] 小土器也 名義

未詳疑クハ閑豆閑午蒡ノ両種ヲ土器ニ盛テ雑煮ノ膳ノ左右ニ置之此両種ヲ盛ル物ト云ノ畧語欤又料ノ物トモ云是モ亦両種ヲ盛料トスルカ

搗栗

和漢三才圖会ニ云搗栗連殻ヲ晒乾稍皺時搗テ臼ニ去殻及ヒ荴皮ヲ則肉黄白色堅味甘美倭俗搗ノ訓ヲ勝ノ字ニカヘテ諸勝負ノ利アルヲ悦テ用之

串柹

同書ニ云貫竹串ニ乾者也或貫縄ニ乾之共ニ下品也按ニ此物其形状似串海鼠ニ故ニ為嘉祝之物ト而用ル飾蓬莱臺ニ欤○酉陽雑俎ニ曰柹有七絶一ニ壽六ニ嘉實ト云云○雑談抄ニ云萬物ヲ摭トルノ義ト云リ柹ト摭ト和訓近故ナラント云云凡榧搗栗串柹昆布柚柑柑子橘熨斗梅干等ノ類飾ル心ナクテハ歳始ノ嘉種トナルヘカラス皆物々當季ヲ専トシ又雑ノ物アリ下准之ニ

橙 注見于上

柚柑 和漢三才圖会ニ曰櫞椵柚属也其枝葉花皆與柚無異實形状亦似テ柚ニ而最モ大ナリト云云柑類惣名橘也故ニ為祝物乎

柑子 大和本草ニ云包橘ヨリ小也皮薄ク瓤ノヘダテ上ヨリ見ユ○時珍本草ニ曰包橘外薄内盈テリ其脉辧隔皮是也○唐故事ニ曰近臣ニ賜黄柑ヲ以黄羅ニ包ム之人各一枝是ヲ為傳柑宴ト云云

橘 和漢三才圖会ニ云太知波奈ハ和名橘類總名也今単ニ称ス太知波奈者乃包橘也専ラ為果ト其皮ヲ為ル薬者ハ乃蜜柑也ト云云○大和本草ニ橘ヲ蜜柑トシ又一種遠州ノ白和柑子ヲ為ニ真橘ト○時珍曰橘品十有四韓彦直ガ橘録ニ詳也○月令廣義ニ曰正月初二日賜橘ヲ於群臣ニ則古今以橘ヲ為嘉祝之果ト○日本紀ニ曰垂仁帝九十年春命田道間守ニ遣常世国ニ令求非時香菓ヲ今謂ル橘者是也○聖武帝天平八年與葛城王之忠誠ヲ賜浮杯之橘ヲ勅ニ曰橘者果子之長上人所ノ好ム是以汝ガ姓ニ賜フ橘宿祢ト

姓始テ此橋ヲ病称者諸兄公也仍為嘉祝之物也

楪

ユヅリハ 文譲木 攴物異名 弓絃葉 万葉 和漢三才圖会ニ譲葉木倩作楪○字彙曰杜音罔旗竿也又橋也○埃嚢抄ニ云杜ノ字ハユヅリ葉也世俗正月ニ是ヲ用漢朝ニハ旗ノカザリトスル由也云々○枕草子ニ云かへての月にはいろもみえぬもの、志はすの三十日にいさく時めきてなき人乃物にもしくやとあはれなるに又よはひのふる歯固の具にももてつかひためると云々此樹ハ新葉生ヒテノ後ニ舊葉落ツ故ニ譲葉ト名ク又和名親子草ト云共ニ和歌ニ詠ス

歯朶　穂長　裏白

本草綱目時珍曰貫衆此草葉莖如鳳尾其根一本而衆枝貫之故名鳳尾ト根ヲ名貫衆ト云々○和漢三才圖会曰葉似蕨及狗脊而葉柔ニ薄面青背白四時不死以テ飾ル元旦ニ嘉祝之物ニ云々一説歯朶ハモロムキト云和名アルヲ夫婦ノ相生ヲ祝スト云々又一説歯朶ハ歯ハヨハイ朶ハエダ朶ハ長延ナル物ユヘ齢ノ延ル義ト云々

昆布

本草綱目ニ曰生東海ニ須流而生出高麗新羅者葉細黄黒色柔靭可食云々○和漢三才圖会云其大者一株而為林葉長サ二三丈謂之長昆布ト大抵幅四五寸長二三尺海人用テ鎌刈取ル之松前ノ之産ヲ為最上ト専ラ為嘉祝之物ト和名似ル嘉字ノ之訓ニ故予○順和名曰比呂米一名衣比須女云々

笣煎

字彙曰糗米爆米曰糗○経験方ニ曰稲米使爆火食謂之白花米○米花急就草 饊 周處風土記 ○袁仲郎詩集ニ云爆糯穀於釜中ニ名字曰孛婁昔ハ元日賣リ之蓬莱臺ニモ敷之ト也今世用白米ヲ豊後国ニテ八尋索ヘモ白米ヲ包テ付是ヲトミト云富ノ字ノ意

熨斗

常為嘉祝之供ト五万米鰒與鮑熨斗並用熨斗ハ

人代之人ノ形状ナリ肓イカリテ腰ホソク寿ハ万歳ヲ保ト古書ニアリト也○ト部古事記ニ曰天照太神伊勢国五十鈴川上ニテ神代ノ人形ヲ学ハセ玉ヒテ熨斗ヲ作リ玉フトナリ安鮑ト云也

野老

本草綱目ニ曰草薢作ニ蔓ヲ生ス苗葉倶ニ青ク作三叉ヲ似ス山薯ニ云ヽ○野老 漢語抄 萞 延喜式 ○和漢三才圖曰蔓葉頗似薯蕷ニ両小白花ヲ結フ青子三稜其根類老薑薯蕷之状ニ最肥大者ハ如耳ノ諸而黄色有節多長鬚俗以テ為野老ト以鰕ヲ為海老ト共ニ充嘉祝之食物ニ云ヽ

海老

委見于上ニ

梅干　梅ぼうし

本草綱目ニ曰梅其實酸シ曝乾為脯ト又入羹臛虀中ニ又含ミ之ヲ可シ以テ香ス口ヲ○和漢三才圖会ニ曰白梅又鹽梅霜梅俗云梅ボシ脯也豊後之産肥大肉厚味美ト云ヽ梅干ヲ梅ボウシトハ倭俗宝珠ヲ凝宝珠ト云カ加ク如意宝珠ニ比セル賀ス詞ナルヘシ

俵子

名義未タ詳ナラ按ニ奥州金花山ニ近キ海ニテ海鼠ヲ取ヲ金海鼠ト云其形状恰モ如ク俵ノ形ノ仍テ祝語トセル歟○春耕系切歯ニ云俵子ハゴ一メ也小殿原ハ武家ノ祝語田作ハ農家ノ祝語俵子ハ商家ノ祝語ト云ヽ○雑談抄ニ云和俗海鼠ヲ呼テナマコト云熬リ海鼠ニ對シテ也俵子ト云其ノ義未タ詳ナラ按ニ此者ヲ子ト称ス子ノ貴キハ太郎ト云ヨツテ太郎子ト云ヘキカタワラコト略シテ云ニヤ太郎ハ男子ノ称也此者海男子ノ名アリ可シ思ヒ合ス此者ノ形チ男根ニ似タル故海男子ト云ト云ヽ鑿説ニヤ

田作　小殿原

和漢三才圖会ニ云五万米鰮也正字未タ詳一名田作又云フ古止乃波良ト漁家海邊ノ石上或ハ簀ノ上ニ攤乾ス小鰮也阿波之産為ス上ト貯ヘテ之ヲ耐フ久ニ和ス諸物ニ煮テ食ス常ニ為ス嘉祝之供ト與ト鮑熨斗並ヘ用フ

押鮎

江次第曰元日押鮎一杯煮鹽鮎一杯云々土佐日記ニモ元日見ユ押鮎塩鮎ヲ云ナリ○大和本草ニ云雨航雑録云香魚鱗細不腥春初生月長一寸至冬月長盈則赴潮際生子生巳輒槁一名記月魚ト云々又年魚ト云其年生ノ其年長スル故也仍為新年嘉祝之食鮎處々ニ可見之

海贏身

和漢三才圖会云海蛳俗云波比生海中小螺也色形似田螺而堅大於田螺春夏共多出其肉上黒中白盤曲隨殼有苓腸去腸煮食之其鹹高賈毎除夜及歳始為祝必用酒肴言取千倍万倍貨殖之祝乎

螺肴

本草綱目曰蝸贏釈名螺師時珍曰師衆多也其形似蝸牛其類多故有二名惟食泥水春月人采置鍋中蒸之其肉自出酒煮糟煮食之云々此物為新年之酒肴者似海贏故並用者乎

数子

同書云鯡之子也

腹出鰤乾之黄白色為上臘月歳始及婚家以為親祝之肴取多子之義同以蝦取海老之義矣○

皅煎賣

字彙説見于上○和漢三才圖会曰糯音祿粿同摂州天王寺民家用河内上糯米穀畧濕而熬之爆脹而稃自脱去潔白如雪花云々

昔ハ正朔ニ家内ニ撒之事アリテ賣ル説アリ今絶ユサレ氏今テモ其遺意ニヤ摂州今宮ノ戎市ニ賣ナリ又一説聖徳太子守屋大臣ヲ討玉フ時稲皆ハゼテ兵粮ノ助トナル是ヨリ始ルト云々

年男

紀事ニ云汲若水人謂年男煮此水謂福沸ト云々年男ハ其家々人ヲ撰テ定之先旧年煤掃ノ竹ヲ以テ拂ハシメ除夜追儺ノ豆ヲ撒シムル事各當年ノ恵方ヨリ初ム是年男ノ役トスル處春来猶家々ノ嘉例勿論ニヤ

庭竈

紀事ニ云置火炉於庭上合家鋪席而團座是謂

庭竈ト云ハ庭〇説文ニ曰庭ハ宮中也从广廷声ト云々然而庭竈ハ且テ宮中并ニ官家ニ其沙汰ナシ唯民間ノ祝儀ナリ倭俗民間ノ坪ノ内ヲ場ト云庭字モ亦並用也竈〇同曰竈ハ炊竈也从穴鼀声〇和漢三才圖会ニ云竈ハ炊ク飲食ヲ資生命之重器也有神毎ニ為清浄可也〇旧事本紀ニ曰興津彦興津姫此二神ハ竈神也〇酉陽雑俎ニ竈神状如美女名隗姓張名單字子郭夫人有六女常以月晦ニ上天ニ白ス人ノ罪過ヲ云々畿内ニ竈ヲ荒神ト崇メ平常清浄ニシテ香華及ヒ供物ヲ備ヘ祭ル月晦ニハ修験者ヲ請シ於竈前ニ奉幣シ誦真言ヲ以テ為荒神ノ禳ト是酉陽雑俎ノ説ニヨル欤今庭竈ト云モ亦竈神ヲ歳首ニ祭ルニヤ

福藁敷 又 福藁

紀事ニ云家庭敷藁是称福藁ト〇雑談抄ニ云民家尋常不常ナル故正月ノ神ヲ祭リ勧請中不浄ヲ除ク心ナルヘシ譬ハ縒道ヲ設テ神輿ヲ行シム義ニ同云々又唯賀客ヲ送迎ノ為トモ見ユルナリ

福沸 福鍋

紀事ニ云汲若水煮之謂福沸ト云々福鍋者用福沸之名也〇雑談抄ニ云和俗ニ七日ノ粥ヲ呼テ福ワカシト云是福トハ餅ノ異名也其故ハ古ヘ福引トテ餅ヲ二人シテ引合事侍リシトヤ其上餅ノ異名ヲ福生果ト云リ今朝粥ニ餅ヲ和シテ煮熟スルヲ云トヽ云々野州邊ニテ鏡餅ヲ福出ト称ス福生果ヨリ云ニヤ或説正月四日ニ神棚ヘ二个日供シタル飯汁菜ノ類ヲ徹スルヲ棚サガシト云是ヲ集メテ一ツニ煮熟メ合家食フ是福沸也云々

毬打 ぎちやう

續日本紀ニ日聖武天皇神亀四年正月数王子乃諸臣子等集春日野而作打毬之楽ヲ云々〇顕昭袖中抄ニ曰十節録ニ云黄帝取蚩尤頭ヲ毬之今

毬杖是也以彼例漢土年始用件毬国中無凶事仍日本国学其
例打毬云〻○増韻云毛毬古謂之鞠○唐僖宗傳記僖宗能撃
毬謂優人曰朕若応撃毬進士挙須作状元○世諺問答曰蚩尤
といふ悪人黄帝にうたれしゆへその悪気疫病といふ神となりて国土
の人民をなやませ末の世に疫病をおこさんとするをまもるとて
ほうくにまちて毬打もちこそはいらす年に正月にかの眼中に人の
とねきて木丁のかたにかけておきしかの眼の字をんを三をわうし
也へとしつる時乃除られ三年に結を来く中に人見さいのさ結より
おこれを毛次正月にちは彼肉なり鳥頭藻ハ翌げ大根なとも
ゐつけておるいもの也わか所にてなるらるもてあつかくと病わり
ていられし疫病神をとりくりて人を悩まもるにいけりとこく
○本朝神社考云正月於真言院所撃之毬杖者行神泉苑是也

其柏子所謂法成就之池者謂神泉苑也○拾芥抄曰真言院在
八省北云〻○雑談抄云万葉ニ玉キハルト詠ルモ年始ノ毬打
ヲ云増韻又唐史ニ云ハ毛皮ニテ作ル日本ノ蹴鞠ノ鞠ニ類
セリ日本ニハ木ニテ造ル近頃ノ由也必竟今世女子ノ翫フ
手鞠ハ毛毬ニ近キ者也昔ハ木毬ハナカリト也然ドモ後成恩
寺殿ノ世諺問答ニ木丁ト遊サレタレハ其頃モ木毬ニヤ唯男
児ノ翫ブ地上石間ニ擲ツ便ナラン後鳥羽院ノ稚キ御時ニ
殊外毬打ヲ好ミ玉ヒケレハ文覚上人故アリテ禁獄ノ時腹
立テ此帝ヲ毬打ノ冠者ト罵ラレケル由平家物語ニ侍ル又
俗ニ振々ト称シテ毬ヲ拂フモノ有毬杖ト云者ニテ杖ノサ
キニ付ル者也當代ハ古来ノ模様ニ変メ二三歳ノ幼児ニ少キ
毬打ヲ紙上又ハ薄板ニ帖シ鶴亀松竹ナドヲ造テ是ヲ毬打ニ

限ルヤウニ称シ其餘ハ玉振々ト各別ニ呼ブ大ナル非セイツレモ木丁ト称ヘシト云ヽ今玉振々ト云ハ即チ昔ヨリノ毬打ニテ腰物ノ目貫縁頭ノ繪様又ハ諸具ノ蒔繪ニモアリ其形状玉ハ大戸ニ付ル戸車ノ如シ宝尽ノ内ノ七宝ト云物ノ如ク彩ル振々ハ木ヲ八角ニ削リ両端ヲ細ク中ブクラニメ細キ方上ノ方左右ニ木瓜形ノ穴ヲ穿チ此処ニ前件ニ云処ノ玉ヲ附テ惣躰金箔ニテダミ其上ニ鶴亀松竹尉姥等ノ繪ヲ彩色ニスルヽ用ル時ハ左右ノ玉ヲ取ハナシ別ニメ是ヲ擲ツ玉トシ八角ノ木ノ木瓜形ノ穴ヘ竹杖木杖ノ如キ棒ヲ貫キ柄トシテ是ヲ玉ヲ打毬杖トス略メハ皆己ガ得物ヲ用

○紀事ニ云北野宮寺奴僕自リ元日至テ三日ニ出テ右近馬場ニ撃ツ毬ヲ云々

羽子板　胡鬼板

世諺問答ニ曰雅きとめく胡鬼のこよてはきゆるハいかなる事ぞや答云おさなきものゝ蚊にくはれぬまじなひに秋のはじめに蜻蛉といふ虫出きて蚊をとるものなり蜻蛉に似たれバ胡鬼の子といふ木蓮子かくがれんぼうからにを結つけゝりこれを紙板にてはきわくれハおつる時とんぼうがへりのやうに似て蚊をおそれかんかへるとさ〳〵○雑談抄ニ云蜻蛉ノ蚊蚋ヲ喰フ事本草ニモ注セリ此板ヲ羽子板鬼板ナトト云リ表ニ譬ハ大臣家ナトノ内々ノ祝儀ノ体裏ニハ爆竹ノ体ヲ画サタリす法不定ニ云ヽ○一説羽子板ハ神功皇后ヲ女武者ノ祖ト御テ己来楯板ヲ表シテ女ノ戯ヒトシ羽子ノコハ矢ニ象ルト云ヽヤリ羽子爆竹ハ子ト云事増山井ニ出名義未考

破魔

弓　破魔矢

世諺問答ニ曰虫尤ヶ眼の瞳を抜く本下の……とし破眼のふくつん三重にはりし由へよう射る時

の的ニ三毛紙ニ画いて中る時ハ除くとこ ○雑談抄ニ或説ニ云然レハ
正月ニ射戯スル濵弓ハ凿丸が眼ヲ射破ル義ナレハ實ハ破
目弓ナルヘシ通唱ノ宜キニヨリ濵弓濵矢ト称ス又魔ヲ破ス
ル意ニテ破魔弓トモ書濵ノ字ニ心ナシト云 ○或説ニ云弓
ハ不祥ヲ秡フ物ナレハ中夭邪気ノアル時ハ必ス弦ヲ鳴メ
秡フ事之故ニ神道ニハ採物ノ中ニ弓ヲ用ヒ佛家ニハ弓矢ヲ
定慧トシ又悪魔降伏ヲ表ス故ニ吾邦正月ニハ王宮神社ニ
射礼ヲ行ヒ或ハ士人小兒ノ弄トスルヿ是年中ノ邪気ヲ秡
為ナリ故ニ云ニ破魔弓ト其所由テ来ル者尚シ矣故ニ異域ニモ已ニ評ス之
北史巻四十倭国列傳ニ曰毎ニ至正月ニ必ス射戯シ飲ム酒ヲ其餘節ハ略與華同
文献通考日本部ニモ此事アリ是
治世ニモ武ヲ忘サル意ニヤト云ヽ

年玉

紀事ニ云正月士農工商及僧徒神官各執
贄ヲ互ニ相賀ス凡新年互ニ贈答之物總テ謂ニ年玉ト ○雑談抄ニ舊事本紀第五
神武天皇元年紀ニ曰歳辛酉正月庚辰朔宇摩志滿治命先献天
瑞ニ亦堅ニ神楯ヲ以テ齋矣謂ニ五十櫛亦云ニ今木刺繞於布都主剣ニ大神
奉齋殿内ニ即蔵ニ天璽瑞宝ニ為天皇鎮祭之時天皇寵異特ニ甚詔曰
近ニ宿殿内ニ矣因号ニ足尼ト其足彦号自此始矣 此天ノ瑞ヲ奏セ
ラレシヨリ代々ノ天皇元日之朝賀奏瑞トテ二人ノ者庭ニ進
テ去年ノ目出度嘉瑞ヲ国々ヨリ申セハ夫ヲ記シテ今日奏
祝スル由也是皆君ヲ賀シ世ヲ祝スル礼義之信ナリオボロ
ケナガラモ民間ニモ年始ニ音物ヲ相互ニ贈答スルモ人ヲ
賀シ春ヲ祝スル祝義之信也唯和俗年玉ト称スル自ラ瑞宝之
義ニ相似タルモ宜也今按
年玉ハ年ノ賜ノ略語カ

寶引 福引

雑談抄ニ云餅ノ異名ヲ福生果

ト云故ニ餅ヲ福ト云古ヘ福引トテ餅ヲ二人シテ引合事侍リト云々福引宝引是ニ始ルニヤ摂州箕面辨才天ノ社ニ毎歳正月七日富ノ行事ヲ修ス得之者必幸在テ萬家ニ恋ルト云是モ亦福引ナリ其外家々嘉事トノ品物ヲ撰集テ合家團取ニシ或ハ縄ヲ付テ引テ得之ヲ福引ト云或ハ宝引ト云

弓始

甲陽軍鑑弓書曰弓始ハ正月七日也豹尾黄幡ヲ忌也是ニヨリテ豹尾ノ頭ヲ踏テ黄幡ノ尾ヲ射ヘシ此時ノ足踏ハ一番ニ開テ足留ルニハツホム足ヲ射ヘシ是ヲ陰陽ニ象也○陰陽暦曰黄幡ノ方弓始ニ吉云々七日ハ禁中ニモ御弓奏アリ武家是ニヨルカ○本朝軍器考ニ云弓矢ハ兵器之第一況至武家源平及諸氏之良持群卒未嘗不事控弦故男子生則挂桑弧蓬矢而賀之有遠略称其人号弓取其名豈虚乎

頼朝定武家礼正月有弓始椀飯献物以弓矢為定額所々游宴以笠懸流鏑馬為事云々○河海抄曰我国ノ弓矢ハ伊弉諾尊ノ御時ニ始レルト又日本紀ニ素盞烏尊父母ノ神ニ逐レ高天原ニ上リ向ヒ給シ時日神背ニ千箭靫ヲ負ヒ臂稜威高鞆ヲハキ弓彇ヲ振起給ヒシトアルゾ此物ノ見エシ始ト云々○釈名云弓ハゆみ也中略しつるハさくる物也弓ハゆがめる物也又矢ハやゐろり釈日本紀ニ弓トハいくハゐるいきなり

馬乘初

雑談抄ニ云陰陽暦ニ馬乘初又飛馬始ト云々是ヲ以テ二事トス難心得飛馬ハ称美ノ詞也武門ノ祝スル乘初ナレハカク云ニヤ又一説ヒメハ馬ノ梵語ナリト未考云々弓馬ハ元ヨリ武門ノ専トスル処六藝ノ其二ナレハ弓始ニツイテ馬乘初勿論ナルヘシ○日本紀ニ曰天武天皇十三年閏四月詔曰凡政要ハ軍事

ナリ是ヲ以テ文武官ノ諸人務テ兵ヲ用ヒ及ヒ馬ニ乗事ヲ習フト云〻
○本艸ニ時珍曰按ニ許慎カ云馬武也其字象ル頭髦尾足之形ニ牡ヲ曰騭
牝ヲ曰騇一歳ヲ曰阜ト二歳ヲ曰駒三歳ヲ曰騑ト四歳ヲ曰駣ト梵書ニ謂テ馬ヲ為ス阿
湿婆ト馬ハ応ス月ニ以テ十二月ヲ而生ス其年ヲ以テ遂ニ別ツ之ヲ云〻○周礼ニ曰凡馬八
尺以上ヲ為龍ト七尺以上騋也六尺ヲ為馬ト○和訓義解ニ
云ムマハ馬ノ音咲ノ音ニ也ムハマノ助組也

蔵開

或説ニ云正月ノ蔵開ニハ内裏ニテ三種ノ神宝ヲ御蔵ヨリ開
始ト云〻○雑談抄ニ云和俗農工商賈ノ類歳始ニ蔵ヲ開テ積蓄
ノ金銀米銭ニ不限一切ノ貨財ヲ取出シ用ニ充テ賣買ノ事
ヲ調フ尤其年始ナレハ吉日ヲ撰テ庫蔵ヲ開ヲ云メリト云〻
○説文曰蔵物所ヲ蓄ル曰蔵又府蔵 朱子曰蔵貨財云府 ○礼記疏ニ曰売蔵ヲ曰倉ト
米蔵ヲ曰廩ト○順和名ニ曰囷一ニ云廩ト 久良 萬呂 一ニ云 久良 与奈 餘 一ニ云庫 乃久良 豆皮毛 ○

日本紀ニ曰推古天皇十五年毎国屯倉ヲ置ル文武天皇義倉ヲ
立ラレ淡路帝常平倉ヲ置レ皆貧民ヲ救ヒ玉フ仁政ナリ北
条越後守実時カ孫顕時カ子金澤越後守平貞顕称名寺ノ内
ニ文庫ヲ立和漢ノ群書ヲアツム世ニ金澤ノ文庫ト云是也

湯殿始

雑談抄ニ云和俗ノ歳始ニ沐浴スルヲ湯殿始ト云〻
世俗ノ云処皆同然ル藤大典侍ノ御局ノ御湯殿
記ニ付テ按ルニ御湯殿トハ臺盤所ヲ云臺盤所ハ俗ニ云臺所ニ
同シ故ニ臺所始ト云意ニテ湯殿始ト云ナルヘシ別ニ世俗
初湯若湯ト云類ニ非ス年中人ノ生命ヲ繋ク食物
等ヲ調フル其元ナレハ第一臺所始ヲ祝フヘキ也

飛馬始

千梅カ篗纑輪ニ梁塵秘抄ヲ引テ飛馬始トカケリ春耕ニ糸
切畫ニ是ヲ難メ云飛馬ノ二字ヲ書時ハ右ニテモ済ヘシ

暦ノ元日ニアルモノハ馬ノ事ニ非ズ真名暦ニハ火水始ト
有リト部家秘説ニテ是又馬ノ事ナラズ深秘ナリト云々或書ニ
ヒメハジメヲ云米ニ六ノ異名アリ内裏ニテハ米ト云其外
ニテハ粎禾米米ナド丶云柳米穀ノ貴事五躰六根六識陰陽
呂律米ヲ以テ此躰ヲ養フサレハ食ヲ炊ニ釜竈水火薪イツ
レモ木火土金水ノ五行ノ気運ヒ集リテ飯トナル尤タウト
ムヘキノ義ナリ然レハ年始ニハ第一米始アルヘキハ人寿百
歳モ生命ヲ繋クハ此物ナリ○枕草子ニひめ始ト云事アリ○
春曙抄ニ云編糅衣々也或説ニ非米ニ非ル粥ノ義也云々非米非粥
トハ飯ノ類也米ハ蓬萊臺ニ始リ粥ハ七種ニ始ル飯ノ始モ
亦アルヘシ何ゾ馬乗初
アリテ毛馬始アランヤ

着衣始

季吟云衣ヲ着初ル祝ナリ三个日ノ内吉日ヲ擇

論語郷党篇ニ曰吉月ニハ必ス朝服シテ而朝ス朱子注ニ吉月ハ月ノ朔也○李氏曰
礼ニ云正月吉所謂月吉也○雑談抄ニ云暦ニ云キソ着衣トモ衣裳
トモ書衣ヲソトモ読也衣裳ハキスヲキト略シモスソヲソト略シタル也

船乗初

雑談抄ニ云舟ヲ用ル者歳始ニ
乗初トテ一歳ノ祝義ヲナス暦ニモ記之云々摂州大坂ノ船乗
初ニハ舟ニ松竹注連ノ飾リヲ立船霊神ヘ鏡餅神酒等ヲ供
シ水主ヲ揃ヘ乙ツ一タヒ許乗出テ漕戻ルト也其日船持ノ家々
酒肴ヲ調ヘ合家嘉儀ヲ催シ年中廻船ノ海上風波ノ難ナキ
事ヲ神ニ祈リ自ラモ祝フト也○神代巻ニ一書ニ生鳥磐櫲樟船ヲ輙チ以テ
此ノ船ニ載ヲ蛭児ヲ順流ニ放棄ト云々○日本紀ニ曰神武天皇戊午歳即位三年前也春
二月皇師遂ニ東舳艫相接ス方ニ到難波碕ニ○又曰崇神天皇十七年
秋七月朔詔ニ曰船者天下之要用也今渡邊之民由無船以甚苦

歩運其令其国俾造船舶冬十月始造船○淮南子曰古人見竅木浮而知為舟○周易曰刳木為舟剡木為楫舟楫之利以濟不通○呂氏春秋曰虞姁作舟云云其外物理論化狐墨子巧倕山海経番禺東哲発蒙記伯任世本其鼓貨狄皆是作舟之人也揚雄方言曰自関而西謂舟為船自関而東或謂之舟○唐韻曰舶海中大船也（順和名曰都具能布祢）又曰艇小船也○釋名曰艇三人所乗也（順和名乎夫祢）（游艇波之布祢）○唐韻曰舴艋小舟也（和名曰豆利布祢）○釋名曰舼艇小而深者曰舼（和名太加世 高瀬舟也）又曰艜艇薄而長者曰艜（和名曰比良太 借云平田舟）○和訓義解曰フ子ハウカブメグルノ上下略フ子ニ通又子ハ根也岩根岸根ニウカブ也

舟玉祭

摂津國風土記云美奴賣松原今称美女者神名其神本居能勢郡美奴賣山者息長帯比賣天皇幸筑紫国時集諸神祇於川辺郡内神前松原以求禮福于時此神亦同来集曰吾議佑仍諭之曰吾所住之山有須義乃木名宣代採為吾造船則乗此船而可行幸當有幸福天皇乃隨神教遣命作舟此神船遂征新羅還来之時祠祭此神於斯浦（弁）留船以献又名此地曰美奴賣又云敏馬浦○雑談抄云摂住吉社ノ側ニ船玉神トテ小社有是則船神ニテ侍レハ美奴賣ノ神ヲ祭レル也然モ船魂ノ義ハ住吉社家者流ノ神秘ト云此船玉ヲ尋常モ船中ニ崇メ奉ル所也殊ニ歳首ニハ餅鮑神酒其外祭奠ヲ整テ祭之云云○和漢三才圖会云舟神名媽祖娘倍謂之舟菩薩唐船来于長崎間所祭神是也本朝以住吉大明神為舟神也舟玉ノ社有於末社

幸木（サイハイギ）幸（サイハイ）

幸木按ニ粥杖ノ類ナリ北国ニテ幸木ト云テ女ノ腰ヲウツヲ云又門松ノ根ニ立

篭（カゴ）藁（ワラ）盒子（ガツシ）

木ヲ聿木鬼歩木ナト云薬盒子ハ薬ニテ盒子ノ如クアミテ門松ニ結付テ供物ヲ此内ヘ備フル也幸龍カ此類カ未考并

興福和訓同

所謂祝詞也

三物連歌 同誹諧 裏白連歌 同

誹諧

紀事ニ云正朔連哥誹諧各開席凡於京師連哥長是號花下又謂宗匠毎年今朝其一家中玩其事者及弟子等聚其宗匠家各作連歌其第一句謂発句自其発句至百句是唯詩句称百韻然對其発句之第二句称脇第三句作之為栄而近世此三句称三物今朝臨作之則剞劂氏鏤梓而賣市中近世誹諧亦然高声呼連歌誹諧之三物而往来街衢○雍州府志曰北野社正月四日有裏白連歌凡連歌懐紙四枚也中古執事誤而脱片面不記之自是為流例存片白紙又別添一枚為五枚依号

者也云々俳諧亦敎之矣

御慶

新年良賤互相偶謂是歳初之祝詞也

去年今年

雑談抄ニ云負徳説ニ去年今年春也去年ト計モ春也今歳ト計ハ句ニ可依師説連歌ニハ去年ト云詞ハ春也今年ハ雑也云々句体ニ依ヘシ 後拾遺ニ

いかにねておくるあしたにいふことぞきのふをこぞとけふをことしと　小大君

尓雅曰唐虞曰載商曰祀周曰年名不同而義一也皆所以成一歳之功也○説文曰年本季作秊熟也从禾千声今作年○尓雅曰稔也謂歳一稔○説文曰歳木星也越歴二十八宿宣徧陰陽一年行一次而四時功畢故夏以歳為年从歩戌声云

君が春

是ヲ大君トモ云烏丸資慶卿ノ書玉ヘルモノニ君トヨム事ハ大君ニ紛レ、ユヘ築地ノ内ニテハ讀ヘカラス又惣別モ二也夫モ君ナラテ誰

ニ哉トえヨリ熟シタル詞ハ
ユルスト也可心得ナリ

ゆるぎなき

新年

新續古今　よろづ世をいはふ心のかみぞとふる
権中納言雅家

千代春

又千世、初春、百世、万代等古歌ニ見ヘタリ

雪玉集　わかしなとも入るかみ心世ふかくとり
なきむかをもろん

逍遥院　わか玉のとし

万葉集曰荒珠之年又璞
荒玉粂玉未玉○仙覚抄曰アラ玉トハ改ルト云心也或云玉
ハマロハスニ滞ラス走ル物ナレハ疾心也万葉ニ〇未玉乃
年往還春立者未都吾屋戸尓
鶯者南計　右中弁家持

わかき年　よしのとし

若キ年作例未考
ヨヒノ年俳ナリ

初雞

御傘曰元日朝雞ノ鳴ヲ云寅魁鳥
初ル鳥ヲイヘハ夜分勿論也元日

ヲ雞且氏云○格物論曰雞有丹白烏三色知時畜也背積陽火
徳之精也故陽出而雞鳴以類感也○説文曰雞稽也能考時也
○索隱曰三號三鳴也言夜至雞三鳴則天曉乃始為正月一日
言異歳也○和漢三才圖会曰和名加介又云久太加介又云木
綿附鳥俗云庭鳥雞家々畜之馴于庭因称庭鳥又称家雞以別
野雞其種類多尋常雞俗呼名小国能鳴告時而丑時始鳴者称
一番鳥寅時鳴者称二番鳥人賞之巳以前鳴者為不祥俗謂之
宵鳴○廣志云大者曰蜀（和三云蜀雞俗云唐丸）小者曰荊（和三云所謂暹羅與平）其雛曰鷇
書名雞曰鳩七咤雞類甚多五方所産大小形色往々亦異江南
一種矮雞脚纔二寸許若群雞夜鳴者謂之荒雞東見黄昏獨啼
者主有天恩謂之盗啼老雞南人以雞卯畫墨煮熟驗其黄以ト
吉凶又以雞骨占年其鳴也知時刻其棲也知陰晴古人言雞能

辟邪則霊禽也不獨充庖而已

初夢

紀事曰凡初夢者自大晦日夜至元旦暁之夢也故舊年晦日之夜禁裏貼畫船於白紙而賜宮方及諸臣地下良賤亦以畫船市卜攜之被底寢今晦日夜有吉夢則来歳得福云若見悪夢則翌朝（元旦之朝也）付是於流水是謂流悪夢和俗斯船内畫種々珍宝故称宝船近世是亦鋟梓而児童賣市中大呼宝船々々是又中華紙船之類乎○文句曰夢者従須陀洹至支佛悉有夢唯佛不夢無疑畫習気故不夢云々○月令廣義曰占夢注掌共歳時観天地之会辨陰陽之気以日月星辰占夢之吉凶季冬聘王受献吉夢于王

夫木　年くれぬ春来へしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢　西行

初暦　暦開

雑談抄曰此儀ハ只民間ニ云所也禁裏ヘハ冬十一月朔日南都幸徳氏ノ具来年六月迄考タル暦ヲ書進ス又六月朔日ニ十二月迄考テ奏スル由也民間ニモ右幸徳氏并加茂氏考ル所ノ新暦十一月朔日ニ進奏スルヲ大経師所幸徳ナトヨリ申請テ是ヲ板行シテ世ニ弘ム是ヲ大経師暦ト称ス又伊勢神宮ノ御師ヨリ銭ニ添テ送ル是ヲ伊勢暦ト云又豆州三島ヨリ出ルハ三嶋暦ト云々凡ッ暦ヲ賣ハ冬トシ初テ見或ハ頒クヲ春トス王維詩帰燕識古巣旧人看新暦ト作リ暦ハ冬ヨリ用ユレ氏皆春ノ用ヲ弁スル為ナレハ春勿論也○後漢律暦志曰黄帝造暦元起辛卯而顓頊用乙卯虞用戊子夏用丙寅殷用甲寅周用丁巳秦用乙卯漢作太初暦元以丁丑云々自三代而下造暦者各増創云々○日本紀推古天皇十年冬十月百済僧観勒来之仍貢暦本及天文地理書陽胡史祖玉陳習暦法云々

試筆　試毫

吉書初

三中口傳抄ニ曰可キ行フ吉書事年始慶賀移徙嫁娶ニ云〃○紀事ニ曰元日公武両家及地下良賤各試筆是ヲ謂書初ト公家試其業ヲ武家モ亦弓馬劔術鉄炮ノ類各試之○羅山文集ニ云我朝年甫写字者皆稱試筆故ニ試筒試兔試顆試颿試毫或ハ稱試春ト此皆然リ蓋叢林家作偈者之所初為于官家先儒学士之文集ニ未タ之ヲ見也宋ノ六一居士有リ試筆之詩唯言試筆之好悪ヲ也○故事要言ニ云元日筆始ニハ王羲之カ月儀書ヲ用ヘし其文ニ曰日往キ月来テ元正首祚大簇告辰ヲ微陽始テ布キ罄無シ不宣和神養素ヲ云〃尋常凡俗ノ用ルニハ朗詠長生殿裏春秋富不老門前日月遲 保胤 わらはへのてしはに筆とりてよろつの宝かきそあつむる

彈初

傳倡鼓琴瑟之類謂之彈ト也是亦歳首試其業ヲ也琴音禽和名古止 琴徽和名古止知 箏音爭和名象乃古止 箏柱和名古止知 琴操ニ曰伏羲作琴ヲ以ス修身理性ヲ反其天真也琴長三尺六寸六分象ル三百六十日ニ也廣六寸象六合ニ上四方上下也 文上ヲ曰池ト池水平也 下ヲ曰濱ト又或云文上曰岩池下岩池水平也 前廣後狹象尊卑ヲ上圓下方象天池五弦象五行ニ或云大弦君也寛和温小弦臣也清廉不乱云〃 黄帝ハ七五弦伯雅十三弦トス本邦ニ傳ルヿ空穂物語ニ詳也○和琴和名倭万止古止 倭名抄ニ曰日本琴體似ス箏ニ而短小有リ六弦一種有鵄尾琴止比乃古止相傳云日本武尊始作ル以弓六張ヲ成ス音ヲ今製モ亦有リ六弦如張六弓是本朝楽器之始也○琵琶 胡琴 枇杷音琵琶 俗ニ用撥ヲ琵琶本出於胡中馬上所鼓也魏文帝造之ト云〃本朝仁明天皇ノ御宇貞敏入唐琵琶曲傳来是其始也朱雀院御宇博雅三位同息信義信明最モ為堪能也○三線三弦 三五雑組ニ曰三絃常合簫而鼓之然多淫哇之詞唱優之所習耳夫子謂鄭声淫○和漢三才圖会ニ按琉球国好多用之然不為楽器婦女里子等毎

鼓之○鼓弓未詳其始形似三絃小不用撥以小弓絃鼓之○廣
博物志曰夫楽者先王之所以飾喜也軍旅鈇鉞所以飾怒也故
先王之喜怒皆得其齊焉喜則天下和之怒則
暴乱者畏之先王之道禮楽可謂盛矣云々

吹初

字彙曰吹昌瑞切風也又鼓吹凡吹笛簫成音者皆謂之吹云々是亦試笛簫之音
也○簫 笙 簧 俗云之太 匏 俗云豆保 世本曰随作笙長四寸十二簧象鳳之身
正月之音也物生故謂之笙○禮明堂云女媧氏造笙云々○咸甯策
笳管 悲策 和名比千利岐 徐景山云胡人牧馬截骨為筒用蘆貫首吹之以
驚群馬云々一説漢張騫所作為云々○笛 音狄 横笛 和名与古布江 筆談云有雅
笛羌笛二種○律書楽圖云横笛出於羌張騫首傳一曲李延年
造新声二十八曲○籥 高麗笛 和名古万布江 或説云篳篥ハ聖徳太子
高麗ノ沙門恵慈ニ傳授シ玉フ天王寺時国名人笙ハ四位ノ
盛定古今無双也笛ハ狭衣中将名人云々○尺八ハ唐土晋化和
尚ノ作ナリ楊貴妃馬嵬ガ原ニテ殺サルヽ悲ノ声ヲ学トス云々

舞初

紀事曰正月四辻家有楽始舞人楽人来集多有陵王
納曽利云々○禮月令孟春之月命楽正習舞云々○日本
紀曰天武天皇十二月春正月己丑朔丙午 十八日 是日奏小墾田舞
及高麗百済新羅三国楽於庭中○同朱鳥元年正月壬寅朔己未
同日 朝庭大餔是日御御窟殿前而倡優等賜禄云々今正月十七日
禁裏舞御覧清涼殿東小庭有舞楽此節舞楽未始前大隅高橋
隣年交勤鶴庖丁舞楽畢テ後有鶴高盛菓献群臣亦賜之云々柳舞
曲濫觴ハアマタノ説アレトモ蔡邕月令章句舞ハ楽之容也トス云々
呂氏春秋陶唐氏云始陰多滞状人気壅閼筋骨瑟縮故為作舞
以宣導之トイヘリ是等皆人間ニ堕タル作業ナリ専佛世界

ヨリ廿ニアマ子シ十方淨土佛菩薩ノ在ス御元ニ妓楽ヲ不奏ト云フナシ殊ニ都率内院ニハ常ニ万秋楽ヲ奏シテ三会ノ暁ヲマツアイタ當来ノ導師讃嘆シ奉ル月宮ニハ霓裳羽衣ノ曲ヲナシ虚空ヲ行動シ玉フ昔天竺ニハ大樹緊那王笛ヲ吹玉琴ヲ弾スレハ迦葉ハ起テ舞ヒ阿難ハ声哥シ玉フト云〻 以上體源抄出

松囃 謡初

下学集云松拍子○紀事ニ云公武両家有松拍子倭俗正月三日至十五日唱謡或為鼓舞祝之称松柏子松取長久之義三日西東本願寺有能三番末寺僧徒著装束勤之其後能大夫或勤之是謂續能ト云〻

豊臣秀吉公家譜曰天正十五年正月二日有謡初諸士皆献賀儀云〻○御當家亦二日有謡初有献諸家賀儀或賜群臣宴之式

○詩人玉屑云放情曰歌悲如蛩螿曰吟通俚俗曰謡ト云〻○或説云謡能藝ハ桓武天皇御宇ニ日吉ノ社ノ御前ニテ猿三匹寄合テ手ヲタヽキ舞踊リケリ則山王権現ノ御示現トナリ是ヲ学ヒテ近江大和ニ猿楽トテ四座ヲ定メ近江ノ猿楽ハ猿ノ字ヲ用ヒ大和ノ申楽ハ日ヨミノ申ヲ書トイヘリ人皇三十四代推古天皇御宇豊聡太子国ヲ監シ天神地祇ヲ祭祀シ給テ以テ安国利民ノ政ヲシキ玉フ因テ六十六番ノ曲ヲ作リ河勝ニ命シテ遂ニ橘ノ内裏ノ紫宸殿ノ前ニオイテ此業ヲナサシムヨツテ四海波穏ニ萬民康楽也太子其神楽ヲ以テ神ノ字ヲ折テ是ヲ名付テ申示ト云説文ニ申モ亦神也大歳申ニ有トキ猿ヲ以テ是ニ配ス故ニ後世是ヲ始トシ猿楽ト云也其後村上天皇万機ノ暇太子ノ筆スル所ノ申楽延年記ヲ見玉ヒ群臣ニ告テ曰上諸神ヲ敬ヒ下万民ヲ安スル事申楽ニ過タ

ルハナシトテ則川勝ノ遠孫秦氏安ニ命シテ童子此伎楽ヲ学ス又紀氏アリ氏安カ女婿也故ニ二人共ニ是ヲ起ス氏安二十九世ノ孫ヲ金春ト号ス大和円満井ノ座是ナリ大和四座ト云ハ結崎観世 坂戸金剛 円満井金春 外山宝生 是也猿楽ハ唐ニハ散楽ト云又百戯トモ云杜氏通典ニ散楽ハ隋以前ニハ謂之百戯

初商 初売 売初 買初

紀事ニ云正月四日市中諸商人モ亦始ム其事ヲ凡裁補年中所記物價之簿冊ヲ是帖綴而各祝之倭俗帖ヲ謂帳諸商今日綴年中買売之簿書是称帖綴饗酒食互祝之ト云

店卸 帳閉 帳書

○雑談抄云帳面ニ大福ノ字ヲ題ス其根源洛陽ノ上菩提薬師堂ヨリ始レリ縁起ニ云本尊ハ推古天皇六庚午聖徳太子彫刻シ給ヒ大和国廣瀬郡宮田郷ニ伽藍ヲ建テ薬師ヲシテ本尊トシ造営事終テ大ニ鍛冶諸商人ニ金銀ヲ給フ各富貴ノ身トナル奈良北京難波堺ノ輩此縁ニアヤカラント此堂ニ来集テ帳ノ上書ヲ大福帳ト題スル事大福寺ヨリノ義ニヨレリト云々文亀ノ頃此寺今ノ京ニ移リ今絶

歳旦開

正月撰テ吉辰ヲ連歌誹諧各開テ席ヲ此事アリ歳旦トハ歳首ニ賀詞ヲ発句ニ作リタルヲ云今世ハ冬ノ内ニ門弟ノ句ヲ乞集メテ縷梓是ヲ一帖トシテ歳旦帖ト云此一帖ヲ門中ヘ送ルナリ其事ヲ始ル日ヲ歳旦開ト云○今式ニ云歳旦ハ手際モノニテ佳句稀也尤禁誡ノ詞手尓於葉送リ假名ニモ心ヲ付ヘシ假令ハ高砂ノサシ出ツモリくテ老ノ鶴ノト云事アリ観世左近ハツモリくテト切テ訓ヒシ也云續クレハ手負ノ鶴トキコフル故也此類イカホモ有ヘシト云々

節振舞(セチフルマヒ) 朝節(アサセチ) 夕節(ユフセチ) 節小袖(セチコソデ)

紀事云京師俗自元日至晦日親戚明友互設酒食饗応謂之節ト云節者節句ノ下略ニヤ節小袖モ准之知ヘシ朝夕ハ饗応ノ時刻ヲ云○荊楚歳時記曰元日至於月晦並為酺聚飲食士女泛舟或臨水宴楽按毎月皆有弦望晦朔以正月ハ初年時俗重以為節也（弦三日廿三日 望十五日 晦晦日 朔朔日）為節トハ佳節ト定ル意ナリ和俗正月親戚ヲ饗スルヲ節ト云ハ據之乎○法苑珠林曰唐長安風俗毎至元日已後遞飲酒相邀迎號傳生酒

松内(マツノウチ) 注連内(シメノウチ) 春かが

正月十五日迄ヲ松ノ内注連ノ内ト云十五日ノ朝門戸ノ飾リヲ左義長ニ爆ラス也江戸ニハ七日迄ニテ門戸ノ飾ヲ除ク近来ノ風俗ナリ黒田家ハ古来ノ如ク十五日迄飾アリ

春ナガトハ是モ祝詞ナリ初春ニ三春ノ季長キヲ云

初芝居(ハツシバヰ)

紀事云正月二日四條河原浄瑠璃歌舞妓等始之是称初芝居武江堺町大坂道頓堀等亦然凡年中節句後宴神事後日真方士農工商并人家奴僕以此日為閑暇遨遊任意此等多聚見此芝居芝居者古無桟布四垣亦無之唯坐芝上而各見之依称芝居和俗謂原野曰芝桟布元假皮也今誤称桟敷○雍州府志曰歌舞妓元出雲大社巫女有號久尓者一轉神楽ヲ歌舞古称白拍子之類相比于元禄年中有名護屋三左衛門者元武人而落魄生也在京師則与彼女密通共謀之作歌舞妓之曲又称猿若者三左衛門所毎赴之娼家奴隷男有猿者形貌如猿猴性魯鈍不通人情三左衛門常AT之今世称狂言猿若者始之遂祇園社南門開場催之是歌舞妓之始也自茲遊女長侏

渡嶋其使遊女狹者教歌舞施藝能良賤集誠誑人心乱国滅家之基無過之依之禁女藝寛文中又始若衆歌舞妓云一説芝居号ハ南都興福寺南門前二月新能出於草居也

千壽万歳

紀事曰大和国窪田著尾両村千寿万歳両座大夫来所司庭為鼓舞凡千寿万歳出自窪田箸尾両村在南都西南相去三里許此内有両流則窪田箸尾是也窪田大夫箸尾大夫准九部右部而称之云々千寿万歳正月五日禁裏木造始此日千寿万歳并猿舞東御庭来云々是季吟が千寿ハ猿廻ニて又千寿万歳ハ万歳楽テ踏歌ノ節会ノ学トイヘル也凡京師舞猿者有六人倭俗狙公謂猿麻波志此外姦不能使猿又伏見有六人〇千梅篗纑輪猿曳常ニ有ハ禁庭ニ参リテ舞心ナクハ無季トニハ誤リ前猿曳ノ下ニ見ユ

万歳

是モ千寿万歳ニテ千寿万歳ヲ略シテ云ニヤ〇岷江入楚曰昔正月十四十五日京中ノ遊士月ニ乗ノアナタコナタ歌ヒ舞シヨリ末代ニ千秋万歳ト云テ逸興ヲ催ス事アルハ是少余风也云々千寿万歳大和ノ外ニモ有ケルニヤ〇御湯殿記ニ云元亀三年正月五日北畠のせんずまんざい三人参云々北畠者指南抄ニ一条より北をの為三町とかや然ハ都ノ内ニモ有ケルニヤ今万歳ト称スルハ鳥帽子素袍ヲ着シ鼓ヲ打早歌ヲ唱フモノ也又三河国ニ一流アリ或説ニ大江定基博学大才ニシテ佛道ニモウトカラヌ人ニテ正月ノ祝モ目出度事ハフリタリトテ我知行所ノ百性ニ教ヘ佛法東漸ノ歌ヲウタハセ春ノ始ヨリ世事ヲ忘ルヽ娯トセリ今ノ世ニヒロマリシ三河万歳是也云々

御降（オサガリ）

雑談抄ニ云世俗歳始ニ降ル雨雪ヲオサガリト云按ニアニサガル

ノ転語也云〻一説元日ニ降雨ヲ云○今式云凡例月三日ヨリ千
降雨ヲ吉瑞トス禅才凡月集出云〻十月朔日ゑゆりふり
おさまりしいえん小春の沛雨かな　紹巴　寒も喜は子の様を朔日　西武
きかへ子や嵐ハ花ぞゆかし　貞徳　是十月朔日ヲ小春ノ元日
ト取合タ
ル句作也

寝積（イネツム）　寝挙（イネアグル）

寝与稲和訓相同故ニ為祝詞ニ寝積寝挙亦稲之縁語也○雑談抄云寝臥ト
尋常ノ如ク唱ルハ病床ナトニ紛レケレハ斯ク云也涙ヲ流スヲ米コボスト云ニ同

水祝（ミヅイハヒ）

紀事曰有ニ嬰下新婦ヲ者上則明友聚其家入水於桶大淮其人是祓除之謂也○日本紀孝徳帝紀粗有其儀而後其人設酒食宴謟室而謝之是謂水懸振舞和俗淮水曰加倶留饗応曰振舞又俗新婦言新造言新造宅使居之義也云〻一説永録之頃阿波ノ三好が家士松永久秀が姪女

ヲ竃臣ニ聚ニヨリ此戯レ初ル是婿儀ニ褐色ヲ用ル事黒ハ水ヲ主トス故ニ水ヲ添ルノ謂ト附会ノ説ヲ設ルニ起ルト云〻

懸想文賣（ケサウフミウリ）

紀事曰清水弦指著赤布衣以白布覆頭面纔ニ露両眼而賣紙符於市中是謂懸想文云〻其来由不詳唯祈嫁娶故謂懸想文字

桃符（タウフ）　桃板（タウハン）　桃梗（カウ）　仙木（センボク）　神荼（シント）　鬱塁（ウツライ）

淮南子曰羿死於桃棓詩傳注云棓大杖以桃為之以撃殺羿由是以来鬼畏桃今人以桃梗作杙歳旦植於門以辟鬼由此故也○六帖曰元日造桃符著戸謂之仙木百鬼所畏○凡俗通曰東海度朔山有桃樹屈盤三千里其卑枝向東北曰鬼門有二神曰神荼鬱塁衆鬼出入執以飼虎於是黄帝法而象之立桃板於門戸上

画雞帖戸（テツス）ニ

葦索 荊楚歳時記曰正月朔日帖畫雞戸上懸葦索於其上插符于旁百鬼畏之○易通卦驗曰正旦五更于家庭中爆竹畫雞貼之鑄五色土戸上以壓不祥云々

如願 歳時記曰有商人過清湖湖君問所須有人教云但乞如願君許之果得一婢如願即其名也商有所求悉能致之後因正旦如願晩起商人撻之走入糞壤中不見今人正旦以細繩繋偶人投糞掃中云令如願○五雜組云閩中俗不除糞土至初五日輦至野地取石而返云得寶則古人喚如願之意也云々

葭灰飛 歳時記云立春日取竹為管取葭為灰以葭莩灰實律之端暦者候氣至則灰飛而管通以應六律云々

春盤生菜 齊人月令曰立春日食生菜取迎新之意云々 立春日以春餅生菜相饋送号春盤○本草時珍曰五辛菜乃元旦立春以葱蒜韮蓼蒿芥辛嫩之菜雜和食之取迎新之義○杜甫詩春盤細生菜

綵燕 荊楚歳時記曰立春日悉翦綵為燕戴之帖宜春字于門○王沂公春帖子云綵燕迎春入鬢飛○

戴春燕 歳時記曰立春日貴戚之家翦綵為小旛謂之春旛或懸佳人之頭或綴花枝之下又翦為春蝶云々

初子日

子日の遊 小松引 子日の松 初子の玉箒

扶桑略記曰宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行幸北野雲林院○菅家文章曰扈従雲林院不勝感歎聊叙所観序云予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊厭老又曰倚松根以摩腰習风霜之難犯也和菜羹而啜口期気味之克調○拾芥抄曰正月子

日登岳何耶傳ニ云正月子日登岳遠望四方得陰陽静気除煩悩之術也 十節記 朗詠注ニ云子日遊者正月初子ニ野ニ出テ遊也子日ヲ賞スルニ子細アリ松ニモ子細アリ子ハ北方也北州ノ千年ヲ象ル松ニ倚ハ人モ千年ノ齢ヲ保ツヘキ也○公事根源ニ曰六十一代朱雀院六十四代円融院なとの御時まてこの儀ありけるにや 云○万葉集ニ曰天平宝字二年春正月三日召侍従竪子王臣等令侍於内裏之東屋垣本即賜玉帚肆宴于時内相藤原朝臣奉勅宣諸王卿等随堪任意作歌并賦詩仍應詔旨陳心緒作歌賦詩 一首未得諸人之賦詩并作歌也此歌依大蔵政不堪奏之也 右中弁大伴宿祢家持

始春之初子乃今日之玉帚手尓取加良尓動其玉乃緒

八雲御抄ニ曰是ニヨリテ心得又初春ノ初子ニカクスレハ命モノフルト詠ル也○顕昭袖中抄ニ曰此玉帚トハ蓍ト云艸ニ子日ノ小松ヲ引クシテ箒ニ作テ田舎ノ家ニ正月初子ニ蚕飼スル屋ヲ帚初ル事ニ云○髄脳抄ニ曰能因法師讃岐前司兼房の車にのりてゆくに二条と東洞院とは伊勢か家まてありけるに子日なりし松のわかきをとさしてひきいてありけるをいとおもしろきなる松をそちかくゆくわたりの家のみえぬれは車の尻にまとゐてありける兼房わやしみて問ふは能因云この松の本は伊勢かむすひし松なれはいまやいふぞ車にのりかかるへきやとおもふにありけるとて松の見ゆるかきりはのらさりけるとそ 子日松ハ根ニ引ユヘニ和歌連歌ノ作意ニ子ヲ根ト松ニヨセ有心アリ依テ子日植物ニ越嫌ノ有ナリ

初寅

紀事ニ曰正月初寅日師々頭山鞍馬寺詣是謂初寅参此日鞍馬土民以福等木作鑰以賣之是謂福掻掻取福徳之謂也又賣生蜈蚣是謂御福蜈蚣多門天之所使

令者也凡鞍馬山中不狼雑言雑好食蜈蚣之故也云々○元亨釈書曰當山者大中大夫伊勢人之所創也大夫帰仏尤篤常曰安得勝地建道場安観音像延暦之間夢往城北之山有翁鬚髪皤々告曰此地甲天下山似三杵常出五色雲汝営練若利益無量大夫寤中問曰誰乎翁曰王城鎮守貴船明神也覚而未知何處大夫有白馬常所騎也装鞍語曰昔摩騰法蘭載舎利像経白馬来震旦然者白馬者霊畜也汝定知我夢地乃放馬従一童子其馬向城北而去至一山河駐茅草中童還告此事大夫往見其地宛如夢中適於茅裏得毘沙門天像創一宇安像故号鞍馬寺大夫以為我欲安観音像今只置天像願未果乎其夜夢童子年十五許告曰當知観音多門名異體同夢覚後解疑云々縁起ニハ南都招提寺僧鑑禎（鑑真徒也）宝亀元年（光仁御宇）正月四日初寅日感得云々

故ニ今世正月初寅日ヲ會式トシテ天下豊饒ノ修正ヲナシ万民参詣ストナリ

畚卸（フゴオロシ）

紀事云初寅詣或又用第二ノ日此日鞍馬近處往還路辺之西山岸高構小菴自其内著縄下簣於路辺参詣男女有欲求燧石者則納銭於簣則以所著之縄提上之應其銭之多少而入燧石而再下之是謂簣下操其簣者鞍馬地出生之地下人而剃髪者交勤之世称鞍馬坊主和俗勧法中之例呼剃髪人専称坊主燧石ハ此山之名産也

初卯

正月初卯日詣摂州住吉神社是謂初卯詣今日於社中授神符於参詣之諸人是謂卯札○旧事紀曰底筒男命中筒男命表筒男命此三神者津守連等斎祠云々○日本紀神功巻曰表筒男中筒男底筒男三神誨之曰吾和魂宜居大津渟中倉之長峡便因看往来船於是随神教以鎮座焉按表津少童中津少

童底津少童従祀神功皇后歟○釈日本紀曰先師説称四座者神功皇后坐別殿歟○摂津国風土記曰称住吉者昔気長足比売天皇世住吉大神現出而巡行天下覓可住国時到沼名椋之長岡之前（前者今神宮南辺是此地）乃謂斯実可住之国遂讃称之云真住吉国乃是定神社云々此神四月卯日出現也仍用卯日乎

卯杖

江次第曰上古有出御南殿皇太子参上儀近代不行春宮被献卯杖其木榠櫨三束木瓜三束比々良木三束牟保巳三束黒木三束桃木三束梅木三束椿三束云々○公事根源曰御杖とは持統天皇三年正月の卯日大学寮より是を奉る由日本紀にみえたり又仁寿二年正月に諸衛府儲杖を献して精魅をはらふとみえたるも是なり悪鬼を掃ふ心ちなり作物所よりもさまざま紙造物なとして甚上には常の中に御帳の方の戯をなくりて卯杖かわしかしむ云々

○浮舟巻卯杖注卯槌卯杖は目出しげにて年中の悪鬼を追ふし三光院殿御説に又ちとせの卯杖をちとせの坂なりといふ事わりをちとせ乃坂は山類にいふ例に松竹なとも其同じ事なり

卯杖はくるしきはさまざまにちとせの坂とも云ひけむ　貫之

漢宮儀云正月卯日以桃枝作剛卯杖厭鬼○漢書王莽伝云正月剛卯金刀之利注服虔曰剛卯以正月卯日作佩之長三寸広一寸四方或用玉或用金或用桃著革帯佩之云々○雑談抄云今ノ世ニ加茂ヨリ卯杖トテ在家ナトニオクルハ一尺余ノ白削タル木ニ日蔭カツラヲ纏テ倶利伽羅竜ノ形ニ作レル物ト云々

二宮大饗

日本紀曰天武天皇朱鳥元年春正月壬寅朔戊午宴後宮○日本後紀曰淳和天皇天長七年正月群臣拝皇后賜被又賀皇太子云々○公事根源曰

正月二日主卿以下二宮に参りて拝礼ありて饗食に預く事なり二宮は東宮中宮の御事也と云々 ○小右記曰長和二年正月甲午左大臣以下秉燭参内暫候雲上次参中宮〈飛香舎〉左大臣以下著中宮大饗〈玄暉門西廊外〉其儀如例初献左大臣〈外〉大夫道綱奥一献了餛飩次第云居飯下箸後一巡了給禄左大臣以下侍従等次著東宮大饗〈同門東廊〉初献左大臣傳右大臣其作法如中宮諸卿已下給禄了退出参入御相名略之

朝覲行幸

先代旧事本紀曰正月二日天皇幸朝太后宮天皇於南門下乗自門至階敷茀結三重唯天皇幸結上諸卿之結下天皇歩也地尊親母也先太后奉褥次天皇奉褥居又奉頌之礼也奉饗三献已辞御云々 ○周礼春官曰大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰覲冬見曰遇時見曰会殷見曰同此六礼者以諸侯見王為大云々 ○公事根源曰是は天子年始に先上皇并母后の宮に行幸ある也されば嵯峨天皇大同四年八月に朝覲の儀ははじまる嘉祥二年正月廿日に仁明の御門の母后に朝覲のため冷泉院に行幸ありし時南殿にをりて笏をもちて跪給ひしかば周礼に春日に朝し秋日に覲するとみえたりとも朝覲の始なりと云々 ○史記高祖本紀曰六年高祖五日一朝太公如家人父子礼太公家令説太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拝人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎門却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我乱天下法於是高祖乃尊太公為太上皇心善家令言賜金五百斤云々

臨時客

年中行事歌合正月二日臨時客とは摂政関白の家に親王大臣以下の上達部を招きて饗応せらるる事なり

さて済まる公務にてもあり禄ハ修理宮と申すも大方大臣の母屋乃
大饗に年々まへそのゆかしきにあれ饗ぬなき済しての其わ事と○
中右記裏書臨時客者尊客引諸卿列立南庭(殿上人在後)家主降立御前二拝了主客座定(右徳大臣被参時追數坐云々)殿上人著庇坐先居尊者饌(陪膳四位)役供五位三人料數高杯三本次居主人饌次一献(四位持参)主人勧盃殿上人座勧盃五位次二献(蔵人頭勧盃)殿上人座(五位欠)居尊者飯汁高器海雲汁(役人)次居納言以下飯汁(一折敷)次居殿上人汁次三献公卿勧盃参議欤殿上人坐(五位)次汁物(雉羹)次催馬楽朗詠或肩脱次四献公卿勧盃中納言欤殿上人座(四位)次菓子次五献公卿勧盃中納言欤殿上人座(四位)次薯蕷粥次引出物云々(公事根源年中行事其趣同)

ぬうやく

江次第曰元日三献供畢次典薬寮供御膏薬次供御匙盛千瘡膏於金銅小器居中盤供之付於薬女官女官付頭頭傳陪膳陪膳供之主上取之以右手無名指令塗於左掌給云々注云曲右第四指是薬師即相也○後醍醐抄傳御額并耳裏云々御タウヤクノ御膏薬ト書カウ薬ノ名ヲ忌テタウ薬ト号也千瘡膏一名千瘡万病膏

履新之慶

履端之慶同意○左傳曰先王之正時也履端于始挙正於中帰餘於終云々○唐礼楽志曰皇帝受群臣朝賀曰元正首祚景福維新惟陛下與天同體臣等謹上千秋万歳制荅曰履新之慶與卿等同之云々履端ハ端ヲフム也アラ玉リ行年ノ端ヲフミ下ヘテ賀スル心也フマヘルハ領スル心欤履新モ同シ意ニテ改年ノ御慶ナトイフト同シト季吟モイヘリ

叙位

日本紀曰推古天皇十一年冬十二月戊辰朔壬申(五日也)皇太子豊聡請于天皇始行冠位大徳(四位)小徳大仁(五位)小仁

大礼（六位）小礼大信（七位）小信大義（八位）小義大智（初位）小智并テ十二階ニ々
同十二年春正月戊戌朔始賜冠位於諸臣ニ各有差成敗○江家
次第曰叙位諸卿著仗次著議所ニ○公事根源曰天智天皇
十四年正月に諸王諸臣に爵位を授けられしより此叙位ありけるは
六日に行はれしを天武天皇より五日に移さる此儀ありしハ後の年
労叙参して位を授けらる叙するなりし○観音寺相国御記永享二年
正月六日叙位儀依テ昨日主上御衰日ニ延引今日於摂政直廬被
行之ト云々○執柄家ノ衰日モ亦除カレ六日ニ被行常ノ事ト云々○職原
抄曰叙位ハ叙其位ニ言昇進ニ○周礼内宰置其叙ニ注ニ叙次也疏ニ介副
也又司市注ニ謂行列也○字彙曰叙从攴余从又○叙位式略之

天狗宴（サカモリ）

紀事云正月二日愛宕寺牛王加持在清水坂西今
日入夜弦指張客殿ニ南北二行座各宴飲其在座上
之人持信木而起舞是謂天狗酒盛ト元轉供酒盛也其體廃豪也
故ニ借其音ヲ或謂天狗酒盛宴終テ後各登堂ニ以牛玉杖大敲門扉或
床壁ヲ又吹法螺撃太鼓其同寺僧貼牛玉是皆攘悪鬼之謂也○
名勝志云以呂波字類抄ニ珎皇寺（ウタギテラ）愛宕寺参議小野篁卿建立開基
慶俊僧都云々○寶物集ニ云珎皇寺ノ北ニアル八ハ八坂塔ト云リ往昔
大寺ナルニヤ○雑談抄ニ云天狗酒盛ハ東西ニ坐ヲ設テ互ニ
脊ノ高キ人ヲ出メ勝負ヲ争フ事ト云々事繁ケレハ略之

人日霊辰七日正月

潜確類書曰正月九七厭日惟人云々○東方朔占書曰歳後八日一日ヲ
為雞ト二日ヲ為狗ト三日ヲ為豕ト四日ヲ為羊ト五日ヲ為牛ト六日ヲ為馬ト七日ヲ為
人ト八日ヲ為穀ト云々○霊辰者唐李嶠カ人日ノ詩ニ七日最霊辰注ニ以人ヲ為
萬物之霊ト故ニ謂人日ト○周書泰誓上ニ曰惟天地万物父母惟人萬

物ノ霊ト云◯七日正月者倭俗正月七日ヲ五節句ノ為初七種ノ菜ヲ食フテ遊宴シテ嘉儀ヲナス是ヲ謂七日正月ト下賤ノ輩正月七日廿日等ノ日ヲ正月ト号スイフ心ハ慾遊スルヲ云畿内ノ土民耕作ノ豊凶ニ随ヒ産沙神ヲ祭リ民家ノ業ヲ止テ休息スルモ亦二日正月三日正月ト云准ヘテ可知

人ノ貼帳

荊楚歳時記曰人日剪綵為人帖屏風上亦戴之頭鬢又或相遺坂新年改舊從新之意賈充典戒曰人日造華勝相遺象瑞山金勝之形

初若菜

若菜七草薺

荊楚歳時記曰正月七日俗以七種菜作羹食之人無万病ト云◯世諺問答曰正月ハ小陽の月なり又七日ハ小陽乃极なりとて朝廷よりも私の家まても[illegible]ものを食されて万病又邪氣をのそく粥なりとそ◯公事根源曰内蔵寮より小内膳司より正月上の子日若菜を奉る事中ころ絶てありしを延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す又天暦四年二月廿九日女御安子より若菜をすゝむ李部王の記にみえたり◯紀事曰今日良賤互相賀自昨日至今朝家々載湯婦燕菁薺等於砧几而以杖敲之代七種菜而用之今日敲之謂拍七艸今朝以是謂菜粥各食之俗同以婦七草之湯漬爪剪之云◯和漢三才圖会曰粥加太粥 饘之留粥 酏毛由 俗云於本綱曰煮米為糜使糜爛也粥濁於糜育々然漢書注云黄帝始烹穀為粥其厚曰饘薄曰酏毛氏曰粥字以二弓象氣之形与弓字不同今皆作弓矣◯張耒粥記曰毎朝起食粥一大椀空腹胃虚穀氣便作所補不細又極柔膩與腸胃相得蓋粥能暢胃気生津液也云◯閲書風俗志云衆人

採聚七様之菜果為羹獮七寶羹ト○雑談抄ニ云公事根源等ノ諸
抄七日ハ七種ノ若菜トアリ十五日ニ七種ノ粥ヲ献スル由
又資隆卿ハ條院ヘ書進スル簾中抄又同或ハ云七種ハ七日ノ
粥ノ事ニテ侍ル七種ノ粥ハ十五日ノ故實也則七寶羹ノ義
ナルヘシ菜果ノ羹ノ義十五日ニ宥ヨシ見タリト云々○大宗
家訓曰七種ノ若菜ヲ調テ氏神并所ノ三寶次ニ父母ニ献メ
後ニ食スレハ春ノ気病夏ノ疫病秋ノ痢病冬ノ黄病モヤマ
ス又人ニ七魂ト云ハ天ニ七曜ト現シ地ニハ七草トナリ是
ヲ取テ食スレハ我魂ノ気力ヲ増命ヲ延ト云々○世説故事苑ニ云
未ニ七種菜事諸子ノ考未見梅ニ事文類聚ニ歳時記ヲ引曰正月
七日多鬼車鳥渡家々搥門打戸滅燈燭禳之以傍倍七種ヲ打
唱ヘニ唐土ノ鳥日本ノ鳥渡ラヌ先ニトト云ハ此鬼車鳥ヲ忌意ナリ

板ヲ打鳴スハ鬼車鳥不止ヤウニ禳也事文ニ引大平廣記ニ云鵂
鶹即鴟也一名姑獲一名夜遊女又ノ名鬼車春夏之交稍遇陰晦
則飛鳴而過嶺外尤多入人家鑠人魂気或ハ云常滴血滴血家則
有凶咎云々○紀事ニ云以今朝之菜粥謂福涌四日亦謂福涌亦煮
若水謂福涌何不知其正也○薺本艸ニ時珍曰薺生済々故謂之
薺釈家取其茎作挑燈杖可辟蚊蛾謂之護生草云能護衆生也
有大小数種小薺葉花茎扁味美大薺科葉皆大味不及並以冬
至後生苗二三月起茎五六寸開細白花云々詩曰誰謂荼苦其甘
如薺是也和名ナツナト云秋冬ヨリ春アリテ茎ナシ故茎ナ
キノ下略也○蘩蔞本艸時珍曰此草茎蔓甚繁中有一縷故名
倍呼鵝児腸菜象形也易於滋長故曰滋草古楽府云為楽當及
時何能待来滋滋乃草名即是也正月生苗葉大指頭細茎引蔓

断之中空也有一縷如絲作蔬甚脆也三月以後漸老開細辨白
花結小實倭名ミキ草古歌アリ○芹本草時珍曰芹當作蘄
从艸斳諧声也後省作芹云○呂氏春秋曰菜之美者有雲夢之
芹雲夢楚地有蘄州蘄縣○亦雅翼云地多産芹故字从斤芹有
二種水芹生江湖陂澤之涯旱芹生平地二月生苗其葉對節而
生其莖有節稜而中空五月開細白花云詩云觱沸檻泉言采其
芹云此草冬月アリ倭俗厳寒ノ間尤賞翫ス和名セリ其妣一
所ニセニリ合也セマリノ中署也異名根白草又ツミマシ草
又エグ氏云○菘本草時珍曰按陸佃埤雅云菘性凌冬晩凋四
時常見有松之操故曰菘今俗謂之白菜有二種一種莖円厚微
青一種莖扁薄而白其葉皆淡青白色八月以後種之二月開黄
花云是蔓菁之類倭俗称之曰菜在水田称水菜又浮菜在圃称

畠菜於諸国称京菜又在水田曰菘生圃曰青云今テスヾナトハ
小菜ニテ少心ヲ云○鼠麹草本草佛耳草和名母子草出文徳
實録曰田野有艸俗名母子草二月始生茎葉白脆云○蘿蔔韓
保昇蜀本草云菜服俗名蘿蔔按尓雅云突蘆肥孫炎注曰紫花
菘也俗呼温菘似蕪菁大根俗名雹突本草時珍曰王禎農書曰
北人蘿蔔一種四名春曰破地錐夏曰夏生秋曰蘿蔔冬曰土酥
謂其潔白如酥也珍按菘乃菜名因耐冬如松柏萊菔乃根名云
是和ニ大根ト称スル物七種ニハスヽシロト云スヽノ詞スヾ
菜同意少心ナリシロトハ根ノ白キヲ云須和名ニ温菘ヲ古
保祢ト訓ス是小大根ナリスヽノ詞ニ叶ヘルニヤ○佛座本
艸時珍曰黄瓜菜其花黄其気如瓜故名二月生苗田野偏有小
科如薺三四五月開黄花花与茎葉並同地丁但差小耳云臭蒿

一名土器菜又名田平子是尋常ノ七種ノ　蓴菜摘　万葉
若菜ト云又公事根源ニ八十二種アリ畧ス　集ニ恵
具ト書リ○為君山田之澤ニ恵具採跡雪消之水ニ裳裾所沾
藻塩草ニ芹の異名かつミよいへりゑぐハねぢがるのことぞへゑぐ乃つらさとも
又云女蒌とかきてゑぐともよめり同事花すとうにさく事れ乃ゑにわるく
俊頼仲実のおとく　そとみゆうきにかたゆるゑこれをまぬつらかなとく
もそこのあゑかを説云　なさし婦るきしるしつたかていしもかたそてわかゐ称号
う○此方と芹此混云はなり　顕昭云ゑぐとハ女蒌と書てゑぐとよ
発りくとこ些同書也或ハ芹とつかし云或わ代も六帖ニハ芹れ介ミ加ゝ
ゑぐとハわけり云々○本草集解ニ蘒恭曰女蒌似白斂蔓生花白子
細荆裹之間名為ニ女蒌ト亦
名蔓楚用苗不用根云々

莪蒿摘

礒菜摘　藻塩草ニかくれはむといひて

これとよめるもあり又よめるもあり芹芽とかくも引く云　春日野ハ
さわらびもえ出るこの春のはるかすみゆる春ふみ乃　○夫木　わかくさのまでまちの
おくきつ露とて野への若菜にとかもやさらむ　信實○順和名曰食経ニ莪蒿一
名莪蒿和名於八木崔禹食経ニ云状似ニ茶草而香作ニ羹食之○詩
小雅ニ曰菁々者莪陸璣注ニ即莪蒿也○本草時珍曰廩蒿一名莪
蒿似テ小薊ニ宿根ヨリ生スル先ニ於百草ニ云々　万葉　春日野ニ烟立所見娘嬬等
四春野之菟芽子採而煮良思毛○礒菜八重垣云磯辺にあらし
若菜のことよめる　新古　なにはえやいさごかつきんは藻にやかくしけり浦の雨乃
し女子　俊成　若菜十二種ノ内水雲
アリ海藻ノ類モ礒菜ナランカ

白馬節會　續日本紀曰
光仁天皇宝
亀六年卯春正月七日天皇御楊梅院安殿ニ設宴於五位以上ニ既
而内厩寮進ニ青御馬ニ兵部省進ニ五位以上装馬ヲ○文徳實録曰

仁寿二年正月甲戌幸豊楽院以覧青馬助陽気也賜宴群臣○
江次第曰左右大将下殿立巽角壇上馬允奏奏文史生持硯大
将先取之奏覧之允取硯候大将加署後取文侍従挿文杖鳥口
参上付内侍退著本坐（件奏留御所）御馬本必二十一匹也毎年近
右寮各十疋進之其残一馬称之餘馬隔年両寮互進之（東書記云日以青馬七疋然而用二十一疋者三七之義也三陽之義七日義之由見寛平御記）次白馬七疋次左右允次白馬七疋次左
右屬次白馬七疋次左右助次右白馬陣渡畢次白馬経殿上前
無名門明義仙華門度御前自瀧口（此門御殿一重御簾）雖御物忌猶度次分
参三宮東宮齋院等次供御膳（臣下應之三献儀式等元日同）三献内教坊別當奏舞
妓奏付内侍奏之（件奏留御所）別當後坐楽人等於射場殿發音楽舞
曲云々○世諺問答曰十節記に白きを馬の性となす天に白龍
わり地に白き馬あり又天の用ハ龍なり地乃用ハ馬なることかや又わりて礼

記に春を東郊にむかへてまつる七疋をかちのくるとみえたり又本文ハ其の
色きハ皆白きものハ皆まちて見あるもいへれハまつるもかくいへり
○公事根源曰正月七日にまつる馬見れは年中の邪気をのぞくといふ
本文の移りに仁明の御門承和元年正月豊楽院にわたりましてまつる
給ふるとぞ云々凡元日七日十六日
是謂三節会然以七日為大節也

菜摘川神事

神社啓蒙云勝手神
社在大和国吉野郡吉野川所祭神一座受鬘命（其祖未考）六十四神
式云天孫降臨之時三十二神相添而奉天降也次為護国後見
被下之卅二神云受鬘命勝手大明神也云々即此神之祭祠也毎
年正月七日此社ノ神人氏ノ男女此川辺ニ至リ若菜ヲ摘勝
手御前ノ神供ニ備祭祀ヲナス故ニ菜摘川ト云○今式ニ云此神
供ニ用ル器ヲ吉野鉢ト云ト云々○吉野山吉水院カ云勝手明神ニ

大宮本地毘沙門天神陽若宮本地文殊并右社頭ハ役行者建立出現ハ人皇六代孝安天皇六年甲子ト旧記ニ載之又神功后宮御建立ノ説アリ正月廿三日神事能有之三月十一日九月十九日両度祭礼アリテ神輿本堂ヘ渡御其外修正会八講等有之トイヘ𪜈今薬摘川神事ト云ヿ不分明薬摘川ハ吉野ヨリ行程一里余薬摘村ニアリ此所氏神ヲ花篭明神ト云小社ナリ何ノ神ト云ヿヲ不知南朝ノ頃ハ六月稜ヲ被行玉フトイヘ𪜈今其形モ絶ヌ尤薬摘川吉野山ニ属セス勝手祭不審云々

箕面富

紀事ニ云正月七日今夜諸人競来堂上突富箭其法天女前置大櫃三箇称第一第二第三也其蓋上開小穴今夕寺僧積置数千枚木札参詣人使寺僧記已名於札上而自穴入櫃内或入一札及三札共入三箇櫃各納了大運轉而後寺僧以長錐自穴突之数千枚中札無已名者不取之然則得富加札之次第云〇摂州豊嶋郡箕面山瀧安寺縁起云当山役小角ノ開基白雉元年ノ草創也小角或時金剛山ニ住シ化他ノ悲願ニ身ヲ拋テ密教求法ニ志ヲ励ム或時乾ノ方ニ当テ一ノ異光有行者希有ノ思ヲナシテ心中ニ誓ラク若我所求ノ霊地アラハ其地ニ落留ルヘシト一ノ三鈷ヲ投玉フ此鈷雲ニ乗シ当山瀧並ノ松ニカヽレリ行者此地ヲ尋来レハ老翁忽然ト現シテ告テ曰此瀧居ニ入ラハ求法心ニ叶ヘシトテ去ル又教ニ任テ龍宮城ニ入龍樹并ニ謁シ深秘ノ大法両部皆会悉ク授玉フ今来レル瀧地是我浄土也辨才天擁護シ給彼瀧ノ辺ニ天女ノ像ヲ安置シ奉ハ扶桑ノ佛法退轉アラシト云々仍テ尊天ヲ彫刻伽藍建立ノ地ナリ今所々富效之ニヤ

御斎會

公事根源曰是ハ大極殿にて八日より十四日まで七ヶ日の間最勝王経を講ぜられ朝家をいのりまつらる此経よりかくの如く護持する功徳あるによりて荒玉の年の始に是を講ぜらるとぞ云々○江次第日本紀曰天武天皇九年始説金光明経于宮中云々儀式具略云講讀師参上衆生座定了雅楽着座唐楽八郷東舶楽郷西法用唄散花梵音錫杖説法論義了講讀師退有執蓋執綱等云々○拾芥抄曰大極殿御斎会神護景雲四年戊午始之有行幸與福寺維摩会薬師寺最勝会已上三会以法相宗為講師○元亨釈書曰釈道慈天平九年冬十月啓最勝会於宮中云々同曰釈源泉播州人也長久四年為最勝講師至四天王品四王現形唯帝獨見餘不見尓来最勝講設四天座勅為永式天喜元年為延暦寺座主然則講師不限法相乎此経一切経中最為第一故題云最勝王是以朝廷建御斎会講論此経護持国家乃至諸州往々講説此経以為勝業所謂薬師寺最勝会等是也云々

真言院御修法

自正月八日至十四日被行之後七日之御修法是也○續日本紀曰承和元年釈空海奏状云伏乞自今以後一依経法講経七日之時將擇解法僧二七人沙弥二七人別荘嚴一室陣列諸尊像莫布供身持誦真言然則顕密二趣契如来之本意現當福聚獲諸尊之悲願云々勅依請修之永為恒例○帝王編年記曰承和元甲寅始置真言院於宮中為鎮護国家五穀豊饒毎年限一七日被修法云々○拾芥抄曰真言院在八省北云々○公事根源曰こゝハ金剛界これハ内年胎蔵界を行はせらると云々

宿直人

○宿直人者漢語抄云晝勤曰直夜務曰宿合

而謂止

乃伊ト云々

大元師法

延喜式玄蕃式曰凡大元師法毎年正月起八日至十四日一七日於治部省修之○公事根源曰治部省にて七ケ日これを行ふ荒人内蔵寮の官人をもて御衣を持て壇所におくる御衣箱に入錦のつゝみにて是をつゝむ法所より返へハ荒人封をつけてこれを結政所にわたりておさめしむ結政の日ハ御衣ハ式ともの如く返上する也云々○元亨釈書曰釈常暁承和元年甲寅入唐謁花林寺三教講論大徳元照受大元師秘法此法彼国不出都ニ照喜暁之器才潜授焉明年帰申官於小栗栖故置法琳寺修元師法斉衡之間天下大旱勅於神仙苑修大元法白竜現幡上大雨普灑云々暁公山州小栗栖路傍棄子也稍長師事元興寺豊安貞観七年十一月晦日逝○雑談抄云斉衡ハ文徳帝之御宇五十五代ニ当ル大元法爰ニ始ルニヤトゾ云